

K-522

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第25集

# 遺跡詳細分布調査報告書 第2集

住宅開発関係の分布調査  
八幡塚古墳の調査  
大樽遺跡の調査

平成元年3月

米沢市教育委員会

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第25集

# 遺跡詳細分布調査報告書 第2集

住宅開発関係の分布調査  
八幡塚古墳の調査  
大樽遺跡の調査

平成元年3月

米沢市教育委員会

---

## 序 文

この報告書は、昭和63年度に文化庁の補助を受け、住宅開発に伴う遺跡の詳細分布調査を実施した報告書です。

米沢市は昭和60年度に市内383ヶ所の遺跡地図並びに遺跡地名表を作成し、開発関係各方面に配布周知を図ってまいりました。その後、新たに27の遺跡が登録され平成元年3月現在で410ヶ所を数えるに至りました。

住宅開発に伴う遺跡の詳細分布調査は昨年に引き続き2年目であります。開発関係者の深い御理解をいただき、順調に推移しております。特にこの調査では住宅に近い所が多いため、調査の様子が手に取るようわかるので、大変興味を持っていただいていると思っています。

今年度の調査の大きな成果は、各遺跡についての範囲や性格が判明したことはもちろんであります。5世紀前半に想定される古墳が確認されたことです。これは窪田町窪田字八幡堂にある八幡塚古墳であり、前方部の高まりが西側に伸びる二段構築の円墳で、前方後円墳の初期的な形態ではないかと考えられます。この東方1kmのところに戸塚山古墳群があり、山頂の帆立貝式古墳、前方後円墳とのかかわりを持つ平地古墳として、古墳文化の変遷を解明する多くの貴重な資料が得られました。又、館山地区の分布調査では、中世の城館趾と深いかかわりを持つ遺構も確認され大きな成果がありました。

今後も、住宅開発と埋蔵文化財の保護保存につきましては、開発関係者と調整を図りながら調査活動を積極的に進めるとともに、先人の所産である文化財を愛護するよう啓発に努めていかなければなりませんと考えております。

最後になりましたが、本調査にあたり格別の御指導、御協力を賜わりました文化庁、山形県教育文化課、地権者の方々、地元の皆様に対し、心から御礼申しあげます。

平成元年3月30日

米沢市教育委員会

教育長 小 口 亘

## 例　　言

1 本報告書は文化庁の国庫補助を受けて実施した昭和63年度の埋蔵文化財分布調査事業の調査報告書第2集である。

2 調査は米沢市教育委員会が実施したものである。

3 調査体制は下記の通りである。

調査主体 米沢市教育委員会

調査総括 桜井三男

調査担当 手塚 孝

調査主任 菊地政信 金子正廣

調査補助員 原 三郎 小林理香

作業員 皆川清助 菅野芳信 中島国雄 石川金吾 高橋光男 遠藤昭一 佐藤峯雄

　　我妻二雄 関谷かほり 小林博美

事務局長 二宮幸雄

事務局員 梅津幸保 山田 隆 山口恵美子

調査協力 佐藤文衛 佐藤 久 石山忠美 桑原仁助 阿部一弥 横山 孝 佐藤保栄

(敬称略) 浜田善弘 渡部石材店 八幡神社氏子 (株)日本防災 雲田地区賣領塚保存会

4 掃図の縮尺は遺構を40分の1、60分の1、80分の1、土器類、陶磁器、拓影図を3分の1、土器は現寸、礎器を1.5分の1としたが、八幡塚古墳出土の土師器に関しては、1分の1とした。写真図版はおおむね2分の1とし、スケールを示してある。方位は真北に統一した。

5 本遺跡より出土した遺物は整理し、米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山200）に一括保管している。

6 遺構の土色については『新版標準土色帖』(小山・竹原1973)による。

7 本書の作成は手塚 孝、菊地政信、金子正廣が中心となり、第1節～第3節を金子、第4節を手塚、第5節を菊地が主に担当したが、全体的には手塚が総括した。編集は手塚、梅津幸保、責任校正は梅津、金子がその責務に当った。

## 本文目次

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 序文                         |    |
| 例言                         |    |
| 第1節 昭和63年度宅地開発に伴う埋蔵文化財調査経過 | 1  |
| I 住宅開発に係わる遺跡の確認            | 1  |
| II 住宅開発による遺跡確認の概要          | 2  |
| III 宅地開発予定地内の試掘調査概要        | 3  |
| 第2節 成島・三沢・上長井周辺の埋蔵文化財分布調査  | 20 |
| 第3節 南原地区周辺の埋蔵文化財分布調査       | 21 |
| 第4節 八幡塚古墳                  | 24 |
| I 遺跡の概要                    | 24 |
| II 調査の方法と調査経過              | 24 |
| III 調査の状況                  | 26 |
| 1) 测量調査                    | 26 |
| 2) トレンチ調査                  | 26 |
| 3) 墳丘の調査                   | 39 |
| IV 出土遺物                    | 39 |
| V 八幡塚古墳の復元と形態              | 44 |
| 1) 周溝                      | 44 |
| 2) 墳丘の復元                   | 44 |
| VI まとめ                     | 45 |
| 第5節 大樽遺跡                   | 47 |
| I 周辺遺跡の分布状況                | 47 |
| II 歴史的背景                   | 47 |
| III 試掘調査の概要                | 52 |
| IV 調査の経過                   | 53 |
| V 検出された遺構                  | 53 |
| VI 検出された遺物                 | 55 |
| 1) 出土土器                    | 55 |
| 2) 石器                      | 59 |
| 《参考文献》                     | 80 |

## 挿 図 目 次

|      |                                     |    |
|------|-------------------------------------|----|
| 第1図  | 荒屋遺跡周辺の地形図                          | 2  |
| 第2図  | 上小菅遺跡周辺の地形図                         | 2  |
| 第3図  | 金ヶ崎 a 遺跡周辺の地形図                      | 2  |
| 第4図  | 成島・上長井・三沢・南原各地区の埋蔵文化財分布図            | 4  |
| 第5図  | 京塚 a, 京塚 c 遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.285,287） | 5  |
| 第6図  | 大代原遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.166）             | 6  |
| 第7図  | 吹屋敷・龍性院遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.153,154）     | 7  |
| 第8図  | 西明寺遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.142）             | 8  |
| 第9図  | 桜神社遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.143）             | 9  |
| 第10図 | 笠野町遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.138）             | 10 |
| 第11図 | 館ノ内C遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.107）            | 11 |
| 第12図 | 高山裏遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.382）             | 12 |
| 第13図 | 太田遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.98）               | 13 |
| 第14図 | 南原中学校遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.219）           | 14 |
| 第15図 | 坂下遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.216）              | 15 |
| 第16図 | 前ノ在家遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.128）            | 16 |
| 第17図 | 大洞前遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.125）             | 17 |
| 第18図 | 大洞遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.124）              | 18 |
| 第19図 | 丹南遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.121）              | 19 |
| 第20図 | 柄庭 a 遺跡分布範囲図（米沢市遺跡No.281）           | 23 |
| 第21図 | 八幡塚古墳周辺の地形図（米沢市遺跡No.306）            | 25 |
| 第22図 | 八幡塚古墳測量図                            | 27 |
| 第23図 | 八幡塚古墳平面図（トレンチ配図）                    | 28 |
| 第24図 | 八幡塚古墳A トレンチ平面図                      | 30 |
| 第25図 | 八幡塚古墳B トレンチ平面図                      | 31 |
| 第26図 | 八幡塚古墳C トレンチ平面図                      | 33 |
| 第27図 | 八幡塚古墳D トレンチ平面図                      | 34 |
| 第28図 | 八幡塚古墳E トレンチ平面図                      | 35 |
| 第29図 | 八幡塚古墳F トレンチ平面図                      | 37 |
| 第30図 | 八幡塚古墳G トレンチ平面図                      | 38 |

|      |                                   |    |
|------|-----------------------------------|----|
| 第31図 | 八幡塚古墳造り出し部分測量図                    | 40 |
| 第32図 | 八幡塚古墳造り出し部分平面図                    | 41 |
| 第33図 | 八幡塚古墳出土土器実測図                      | 42 |
| 第34図 | 八幡塚古墳復元図部分平面図                     | 43 |
| 第35図 | 大樟遺跡周辺の遺跡分布図（米沢市遺跡No.144,149,150） | 49 |
| 第36図 | 館山城縄張図                            | 51 |
| 第37図 | 大樟遺跡構造平面図                         | 54 |
| 第38図 | 大樟遺跡土器拓影図（1）                      | 56 |
| 第39図 | 大樟遺跡土器拓影図（2）                      | 57 |
| 第40図 | 大樟遺跡石器実測図（1）                      | 61 |
| 第41図 | 大樟遺跡石器実測図（2）                      | 62 |
| 第42図 | 大樟遺跡石器実測図（3）                      | 63 |
| 第43図 | 大樟遺跡石器実測図（4）                      | 64 |
| 第44図 | 大樟遺跡石器実測図（5）                      | 65 |
| 第45図 | 大樟遺跡石器実測図（6）                      | 66 |
| 第46図 | 大樟遺跡石器実測図（7）                      | 67 |
| 第47図 | 大樟遺跡石器実測図（8）                      | 68 |
| 第48図 | 大樟遺跡石器実測図（9）                      | 69 |
| 第49図 | 大樟遺跡礫実測図（1）                       | 70 |
| 第50図 | 大樟遺跡礫実測図（2）                       | 71 |

### 付 表 目 次

|      |                   |    |
|------|-------------------|----|
| 第1表  | 宅地開発予定地内遺跡分布表     | 3  |
| 第2表  | A トレンチ土層分類表       | 29 |
| 第3表  | B トレンチ土層分類表       | 32 |
| 第4表  | C トレンチ土層分類表       | 32 |
| 第5表  | D・E トレンチ土層分類表     | 36 |
| 第6表  | F トレンチ土層分類表       | 37 |
| 第7表  | G トレンチ土層分類表       | 38 |
| 第8表  | 戸塚山137号墳・八幡塚古墳計測値 | 44 |
| 第9表  | 米沢盆地における古墳変容概念図   | 46 |
| 第10表 | 大樟遺跡出土石器形態分類表     | 72 |

|      |                            |    |
|------|----------------------------|----|
| 第11表 | 大樽遺跡出土石器計測表                | 76 |
| 第12表 | 大樽遺跡出土礫計測表                 | 77 |
| 第13表 | 大樽遺跡A区aトレンチ南壁溝状造構自然堆積土層観察表 | 77 |
| 第14表 | 大樽遺跡出土剝片分類計測表              | 78 |

## 図 版 目 次

- 第1図版 八幡塚古墳の発掘（1） Aトレンチセクション状況  
Aトレンチ完掘状況
- 第2図版 八幡塚古墳の発掘（2） Fトレンチ完掘状況  
Bトレンチ完掘状況
- 第3図版 八幡塚古墳の発掘（3） D・Eトレンチ完掘状況  
Dトレンチ完掘状況（北より望む）
- 第4図版 八幡塚古墳の発掘（4） 墳丘のセクション状況  
Dトレンチ周溝状況
- 第5図版 八幡塚古墳の発掘（5） Bトレンチから墳丘を望む  
西側から八幡塚古墳全景を望む
- 第6図版 八幡塚古墳出土の土師器（1）
- 第7図版 八幡塚古墳土の土師器（2）
- 第8図版 大樽遺跡の発掘（1） A区調査地点全景（西側より東側を望む）  
B区調査地点全景（北側より南側を望む）
- 第9図版 大樽遺跡の発掘（2） A区調査地点aトレンチ溝状造構完掘状況  
(西側より東側を望む)  
A区調査地点bトレンチ溝状造構完掘状況  
(西側より東側を望む)
- 第10図版 大樽遺跡出土土器（1）
- 第11図版 大樽遺跡出土土器（2）
- 第12図版 大樽遺跡出土石器（1）
- 第13図版 大樽遺跡出土石器（2）
- 第14図版 大樽遺跡出土石器（3）

## 第1節 昭和63年度住宅開発に伴なう埋蔵文化財調査経過

### I 住宅開発等に係わる遺跡の確認

昭和63年度の住宅開発に伴なう埋蔵文化財分布調査事業は、昭和62年度に引きつづき今年度も文化庁の補助を得て実施した。

今年度も、本市教育委員会に届けられた遺跡に係わると思われ、試掘等の依頼を受けたのは、下記の表のように全部で20件（平成元年2月現在）に達するが、その内容は昨年度と同様、住宅開発（新築・増改築・宅地造成）に伴なうもの、次いで砂利採取がその主流を占める。とくに例年になかったものとしては、農林事業と下水道事業である。前者は、標高約600mの柄窪山と西向沼を中心に、市民のリクレーションとしての公園を造成しようとするものであり、米沢市遺跡地図でいう「柄窪a遺跡」（縄文前期の集落跡と捉えている）として登録されている。又、後者の下水道事業であるが、昭和61年度に市内東部地区から始まり、今年度は市内中心部に工事箇所が移り、その中に「米沢城跡」（中世～近世の城館址）の範囲としてくくられている所である。

この事業は、いわば面的な開発というより、線的な開発行為であり、トータルな面積としては大きくなるものの、現実面では管を埋設するだけの極く狭まい範囲である。立会調査を実施した結果造構は道路建設時に既に破壊されていることが判明している。従って下水管幹線埋設工事については「慎重に工事」をするよう指示するとともに必要に応じ立会調査を行うこととした。

とにかく、昨年度に比べて件数では減っているが、国内の需拡大政策の影響もあってか、住宅開発に関するものが多く、それだけに各種開発により遺跡存亡の危機に瀕していることは否めない事実である。

本市教育委員会としては、新たに『米沢市遺跡地図』（第3次改訂版）を作成し、平成元年1月19日に本市関係諸課の職員を招集し、埋蔵文化財についてのレクチャを行っている。

|                     |     |
|---------------------|-----|
| 建築申請（宅地造成も含む）に係わるもの | 10件 |
| 砂利採取等に係わるもの         | 6件  |
| 下水道事業に係わるもの         | 1件  |
| 農林事業に係わるもの          | 1件  |
| 学校グランド造成など          | 1件  |
| 産業廃棄物処理施設に係わるもの     | 1件  |
| 合 計                 | 20件 |

## Ⅱ 宅地開発による遺跡確認の概要

宅地開発に係わる遺跡の教育委員会に届出のあった件数は、前述のように20ヶ所になつたが、その中実際に試掘調査を実施したのは下記の3件である。

以下それについて概要を述べる。

### 1) 荒屋遺跡（第1図）

ここは、奈良・平安・中世と続く遺跡であるが、建築確認（住宅の新築）申請により試掘を行ったものである。結果は陶磁器片1点（伊万里焼、18C後半）を検出した。試掘した結果、遺跡の中心から外れるため、慎重に工事をするよう指示した。

### 2) 上小菅遺跡（第2図）

本遺跡は県内で唯一の旧石器時代の遺跡が存在するのではないかと推定される所である。以前にその大半が土取り場、そしてゴルフ場用地として整備されており、目立った遺物は検出されなかった。

なお遺物が発見された場合には、すみやかに教育委員会に連絡するよう、又慎重に工事を進めるよう指示した。

### 3) 金ヶ崎の遺跡（第3図）

ここは、西に松川が流れ、又小河川が東から西に流れを変える河岸段丘上につくられた中世の集落跡である。すでに建設業者らの手によって土取りがされ、その上に客土として今回ホテル建設が計画された。従って、その東側の畠地・土取り場と道路を狭んだ南側の西半分が遺跡として残っている。

慎重に工事を進めるよう指示した。



第1図 荒屋遺跡周辺の地形図



第2図 上小菅遺跡周辺の地形図



第3図 金ヶ崎の遺跡周辺の地形図

### III 宅地開発等予定地内の試掘調査概要

今年度は米沢市の南西方向から西側にかけての範囲を選出し、ことに遺跡が集中する斜平山丘陵山麓線辺と成島丘陵一帯の二ヶ所に限定した。即ち斜平丘陵辺はかつての松川によって形成された河岸段丘上に立地するものが多く、今回の分布調査の対象となった宅地が密集する遺跡として把握したのは11ヶ所である。次の成島丘陵は大槻川及び鬼面川の河岸段丘上に立地する5遺跡を選別した。ここでは地域性を鑑み、成島・三沢・上長井・南原地区の4ヶ所に大別してここに試掘調査の概要を記する。

今回試掘調査をした遺跡の分布状況を把握するために、全体的な遺跡群としての性格を述べると、成島周辺は鬼面川によって形成された左岸丘陵に点在し、縄文中期を中心に早期・前期の大集落が形成されている。この中で大日向a～cの3遺跡は、昭和62年にリンゴ園造成に係わる発掘調査を実施し、縄文早期・前期の集落跡、中世の信仰的な塚（修法壇）と縄文期のキャンプ地など極めて重要な成果が得られている。又、大日向遺跡の北側に広大な面積を誇る成島遺跡は、縄文中期前半期の大集落であり、当地から検出される三脚石器は全国最大の出土を数える。

次の旧松川河岸段丘及び大槻川流域には80ヶ所の遺跡が集中する米沢第2の遺跡集中個所であり、縄文中期から後期といった比較的新しい縄文の遺跡が分布する地帯である。

今回の分布調査で得た遺物は紙数の都合で割愛したが、本市教育委員会が保管している。

第1表 宅地開発予定地内遺跡分布表

| No. | 遺跡No.   | 遺 跡 名   | 所 在 地               | 種 別 | 時 期       | 開発予定内容 |
|-----|---------|---------|---------------------|-----|-----------|--------|
| 1   | 285,287 | 京塚a, c  | 広穂町上小管字京塚川内2-826-6他 | 集落跡 | 縄文・平安・中世  | 宅地造成   |
| 2   | 166     | 大代原     | 大字築沢字大代原3,398他      | 集落跡 | 縄文        | 宅地造成   |
| 3   | 153,154 | 吹屋敷、龍性院 | 赤芝町字古屋敷1956,堂ノ下101  | 集落跡 | 縄文        | 宅地造成   |
| 4   | 142     | 西明寺     | 大字遠山町字薬師下1,540他     | 集落跡 | 縄文        | 道路拡張   |
| 5   | 143     | 桜神社     | 大字古志田町字鶴野前2,865他    | 散布地 | 縄文        | 宅地造成   |
| 6   | 138     | 笹野町     | 大字笹野町字大森下7,388他     | 集落跡 | 縄文〔晚期〕    | 宅地造成   |
| 7   | 107     | 館ノ内C    | 大字笹野本町字籠の家6,859他    | 集落跡 | 縄文〔中期・後期〕 | 宅地造成   |
| 8   | 382     | 高山裏     | 笹野町上笹野              | 集落跡 | 縄文        | 宅地造成   |
| 9   | 98      | 太田      | 太田町5丁目541-7他        | 集落跡 | 縄文〔中期〕    | 宅地造成   |
| 10  | 219     | 南原中学校   | 大字李山字遠林9,147-4他     | 集落跡 | 縄文        | 宅地造成   |
| 11  | 216     | 坂下      | 大字李山字東坪穴7,407他      | 散布地 | 縄文        | 宅地造成   |
| 12  | 128     | 前ノ在家    | 大字李山字前ノ在家2,732他     | 集落跡 | 縄文〔中期〕    | 宅地造成   |
| 13  | 125     | 大洞前     | 大字李山字銭子屋敷下1,545他    | 集落跡 | 縄文        | 道路建設   |
| 14  | 124     | 大洞      | 大字李山字大洞寺下1,695他     | 散布地 | 縄文        | 宅地造成   |
| 15  | 121     | 丹南      | 大字李山字長谷場760-1他      | 集落跡 | 縄文〔中期・後期〕 | グランド造成 |
| 16  | 281     | 柄塙a     | 柄塙山                 | 集落跡 | 縄文〔前期〕    | 農林事業   |



第4図 成島・上長井・三沢・南原各地区の埋蔵文化財分布図

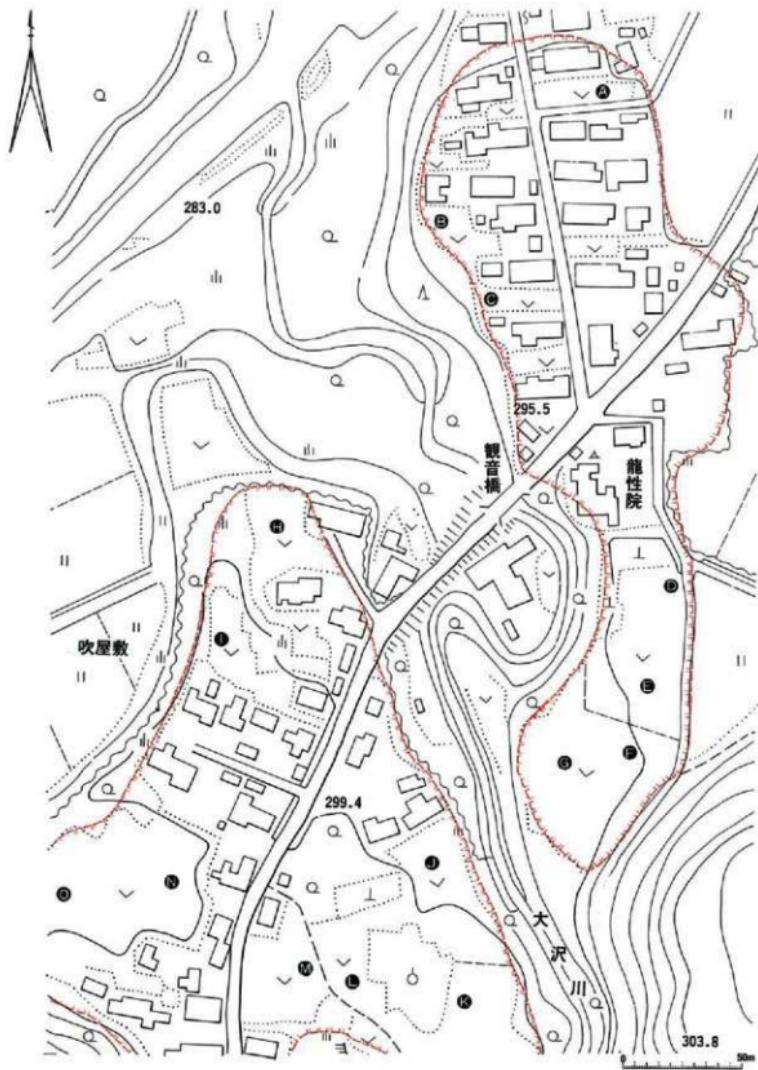
(註) 第4図に示した遺跡分布地図は、今回試掘調査を行った以前の遺跡地図であり、新たに遺跡範囲を明確にした範囲とは、異っていることを加えておく。なお、今回の調査遺跡は、遺跡番号を丸で区画した。



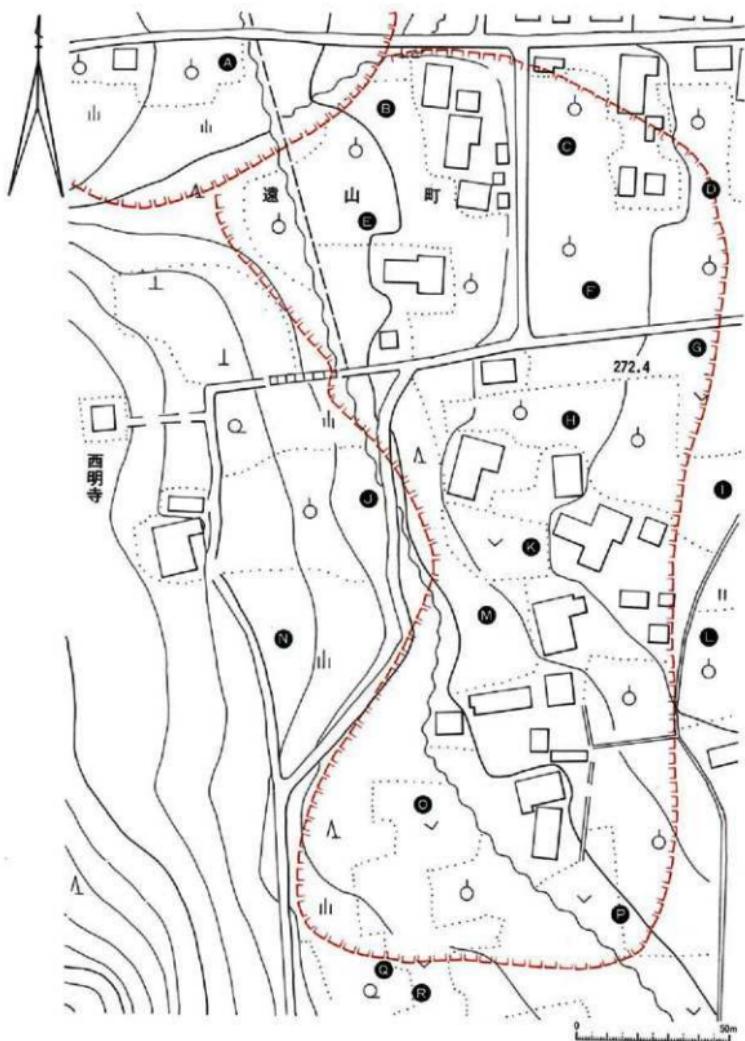
第5図 京塙a・京塙c・通路分布範囲図(米沢市遺跡No.285・287)



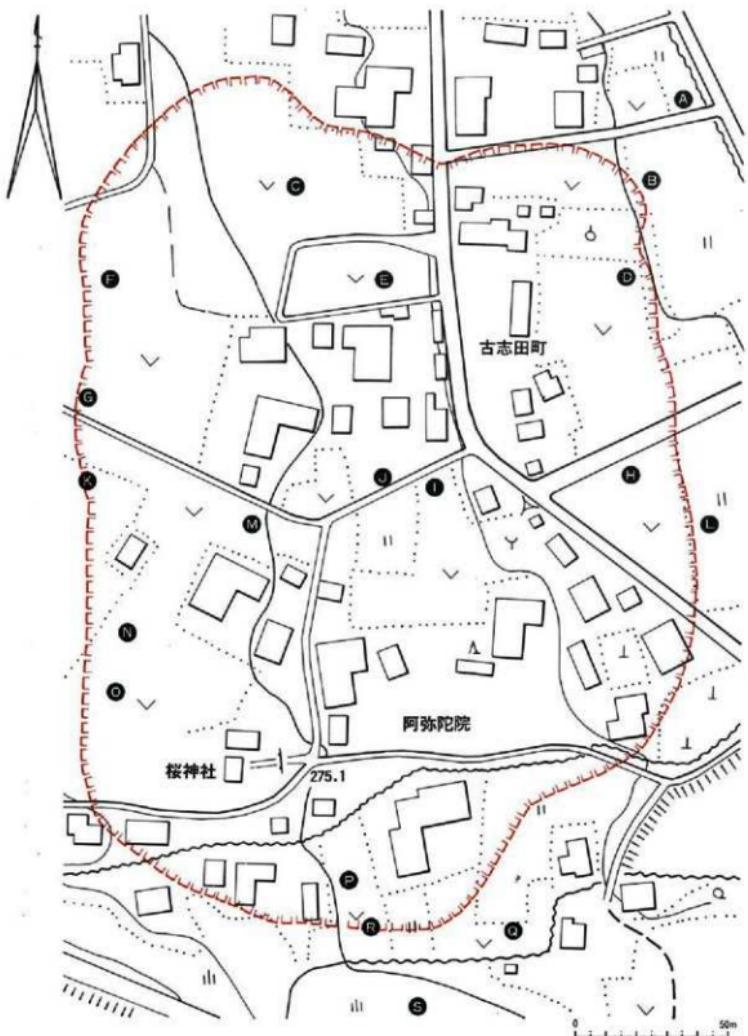
第6図 大代原遺跡分布範囲図(米沢市遺跡No.166)



第7図 吹屋敷・龍性院遺跡分布範囲図(米沢市遺跡No.153・154)



第8図 西明寺遺跡分布範囲図(米沢市遺跡No.142)

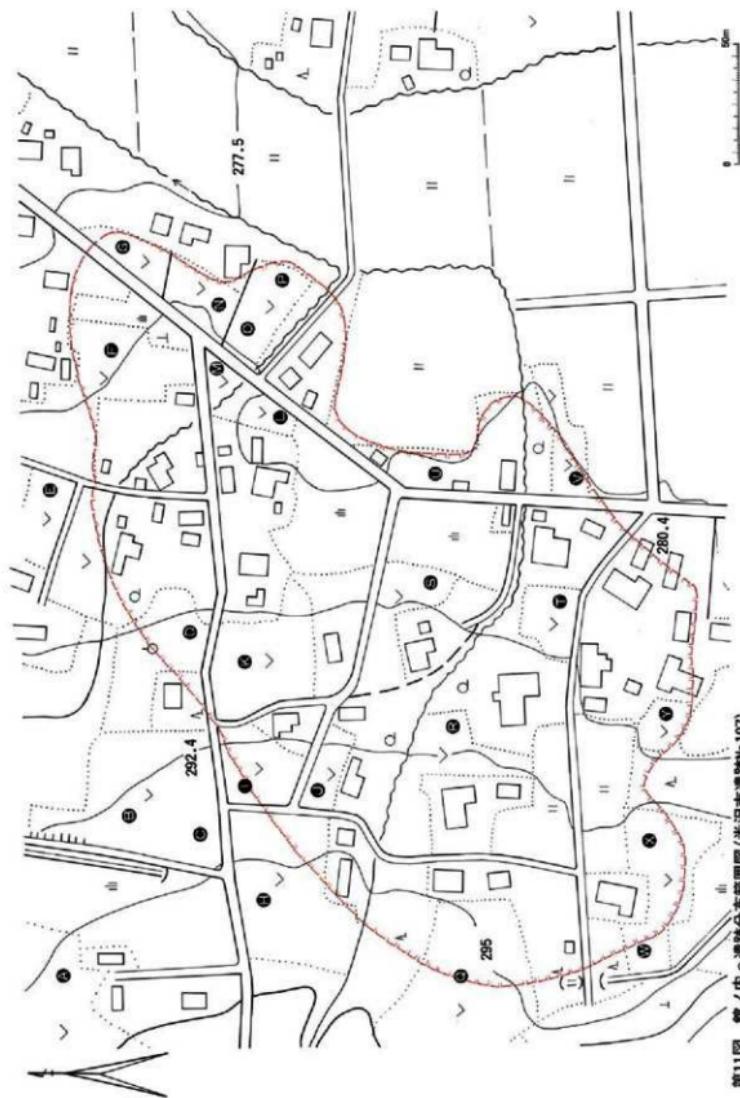


第9図 桜神社遺跡分布範囲図(米沢市遺跡No.143)

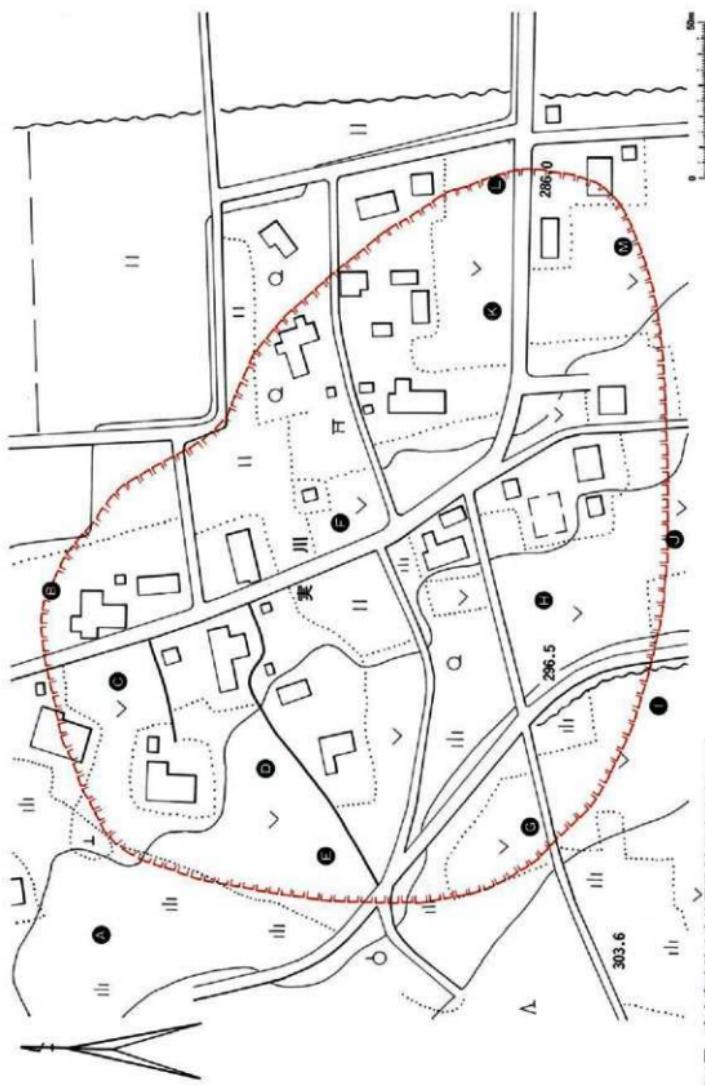


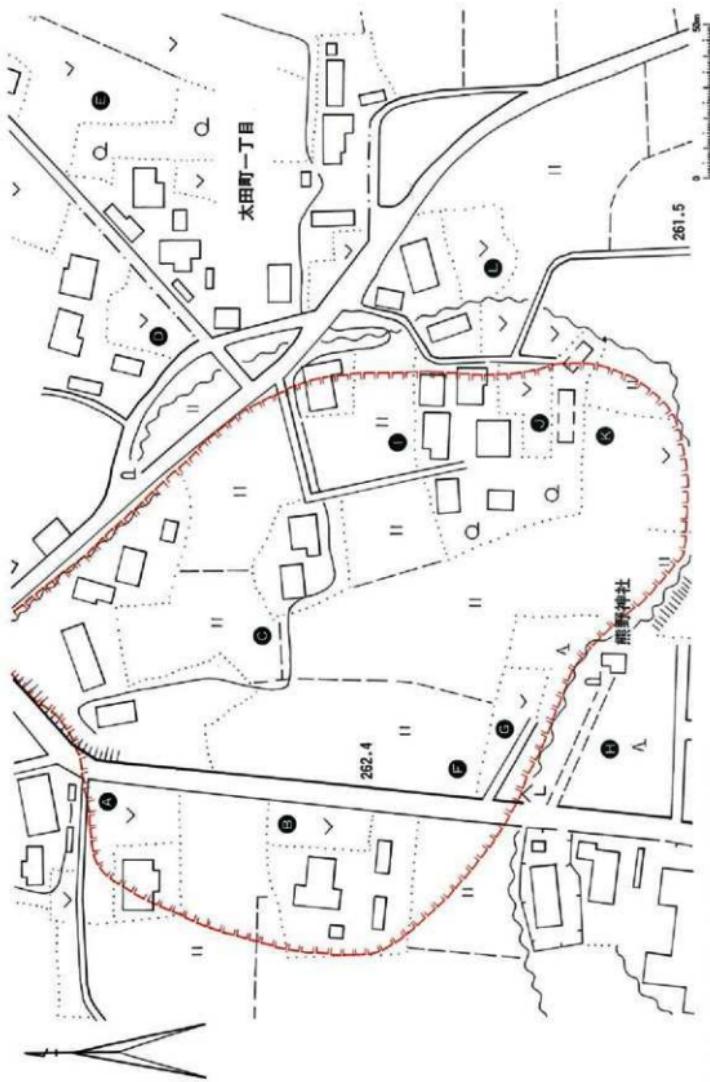
第10図 笛野町遺跡分布範囲図(米沢市遺跡No.138)

第11図 館ノ内・通路分布範囲図(米沢市道路網No.107)

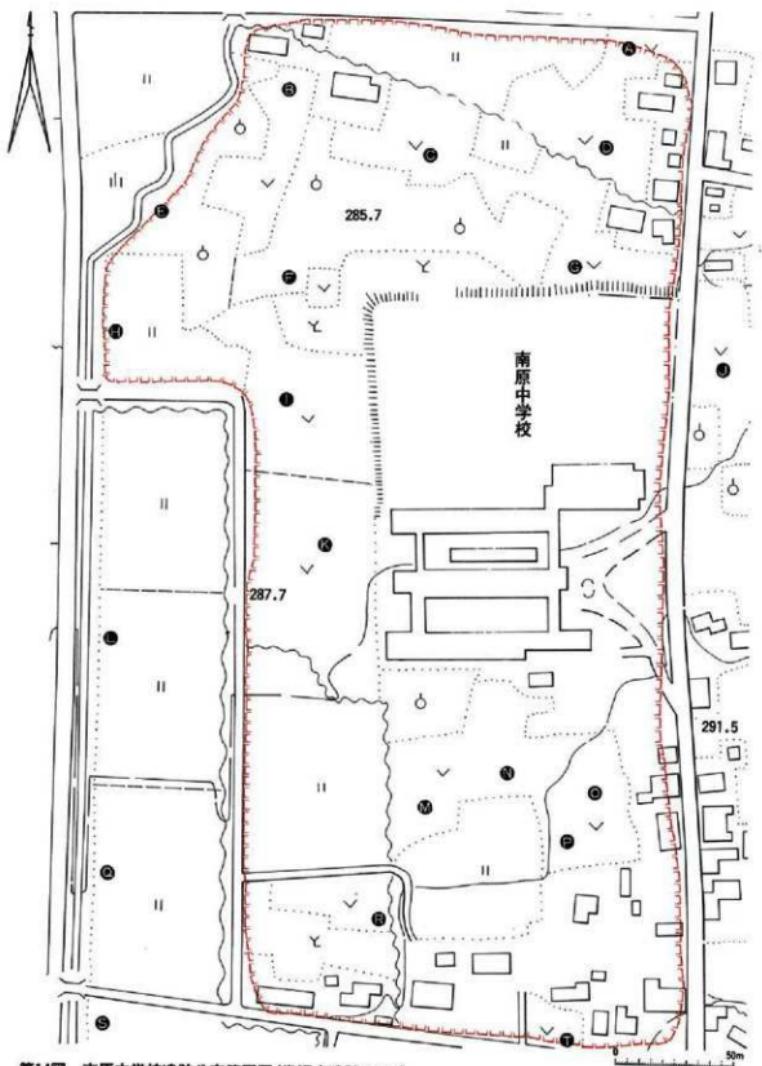


第12図 高山裏道筋分布範囲図(米沢市道路No.382)

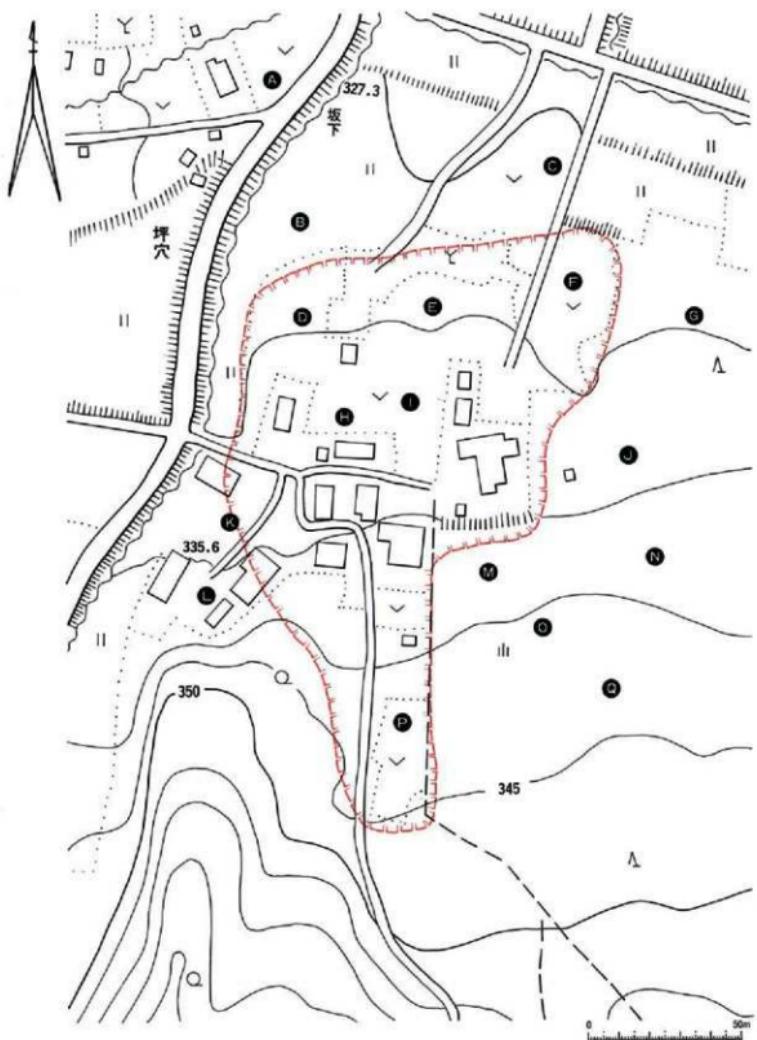




第13図 太田遺分布範囲図(米沢市選跡No.98)



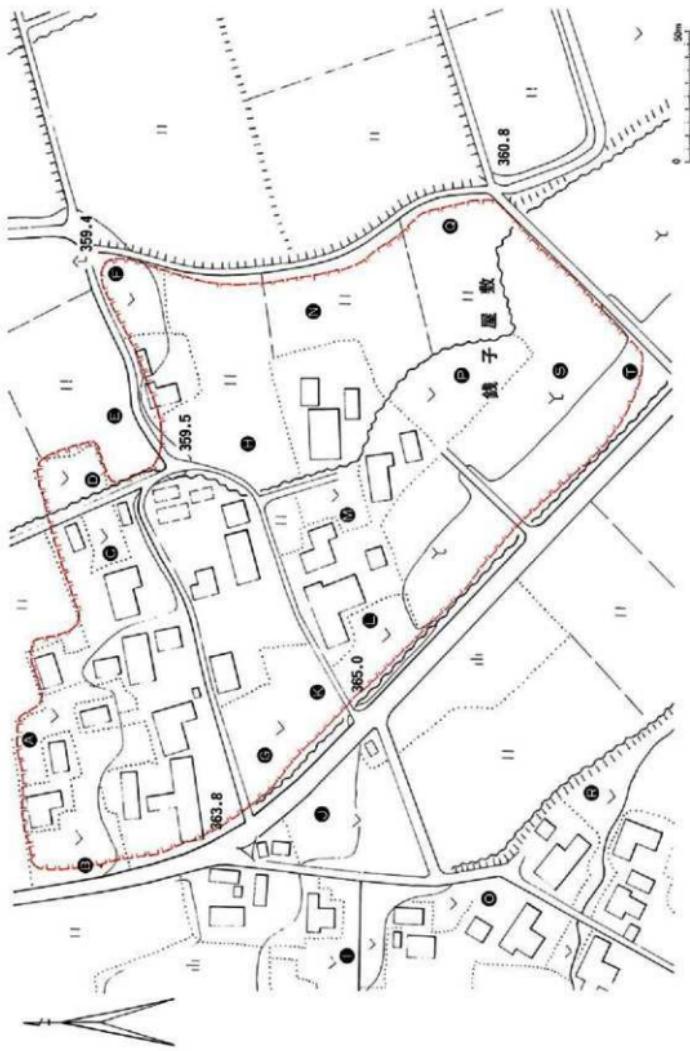
第14図 南原中学校遺跡分布範囲図(米沢市遺跡No.219)



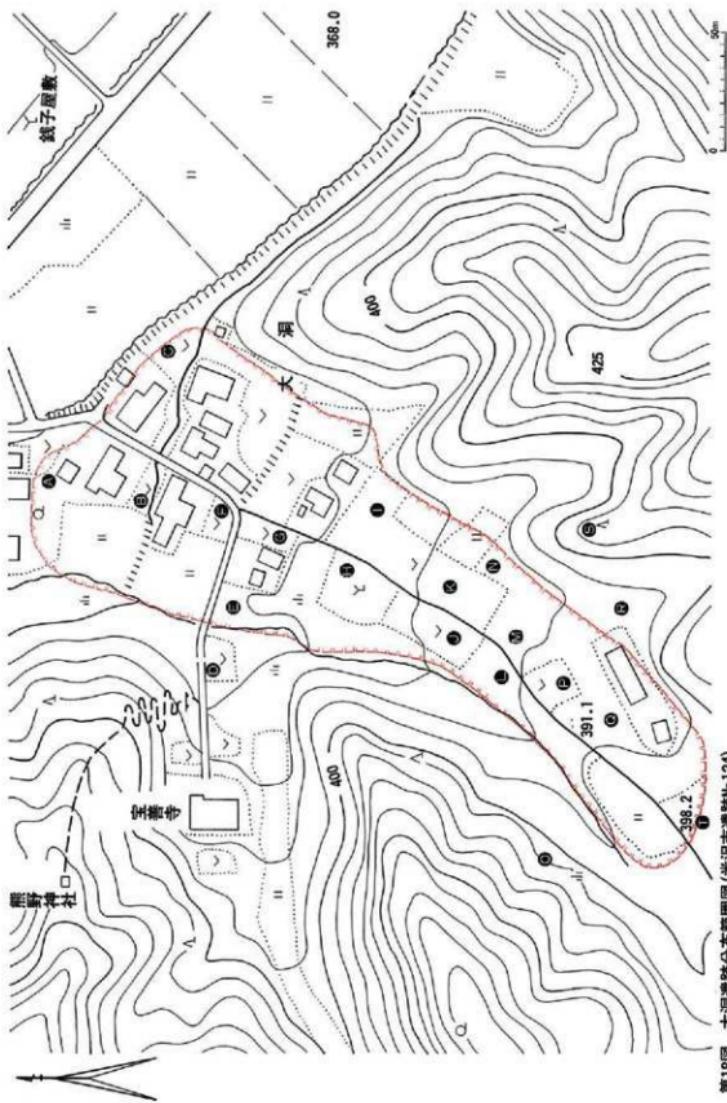
第15図 坂下遺跡分布範囲図(米沢市遺跡No.216)



第16図 前ノ在古墳群分布範囲図(米沢市遺跡No.128)

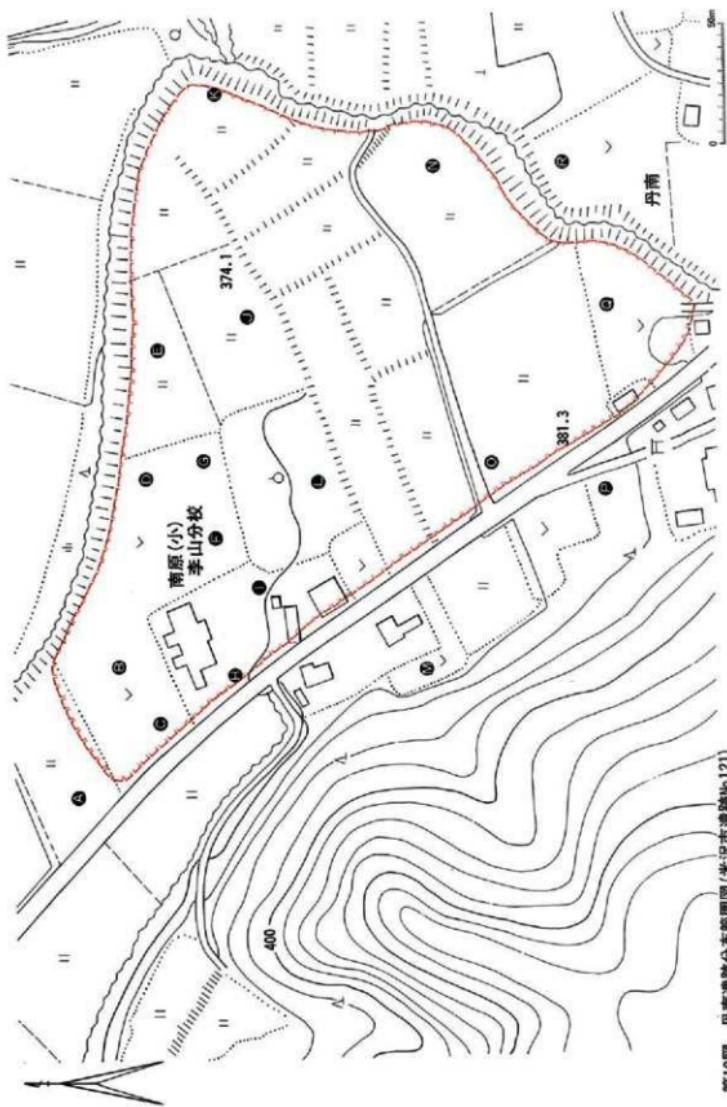


第17図 大洞前進跡分布範囲図(米沢市遺跡No.125)



第18図 大洞群分布範囲図(米沢市道筋No.124)

第19図 丹南遺跡分布範囲図(米沢市遺跡No.12)



## 第2節 成島、三沢、上長井周辺の埋蔵文化財分布調査

本節は大樽川と鬼面川の流域、更に斜平山丘陵東側に沿う遺跡群である。手塚 孝氏の『米沢の古代文化』(1986)によると、「大樽川流域には、大白布遺跡を筆頭に小樽川と合流する館山発電所付近までの河岸段丘に21ヶ所、年代は縄文前期、中期、後期」の遺跡群、その他網木川流域に9ヶ所、太田川流域に11ヶ所、小樽川流域に22ヶ所の合計63ヶ所の遺跡が確認されている。

又、成島周辺の遺跡群は、「川西町からのびる玉庭丘陵の上端部と落合部落を東流する小河川流域に分布する遺跡群」であり、特に、成島遺跡は、使用不明の三脚石器を出土する遺跡として全国的に注目されている。今回は国道121号線の整備改修工事、ゴルフ場の建設設計画などの開発が明らかな地域であるため、分布調査を実施した。以下、各遺跡毎に述べることにする。

### 1. 京塚a、京塚c 遺跡 [第5図 米沢市遺跡No.285, 287]

石切山の舌状山麓線近くから、北西より北東部にかけて流下する誕生川の左岸段丘に、旧鬼面川が複合した菱形状の台地に分布している。当初は京塚a、cが隣接して存在するものと考えられていたが、試掘調査の結果、一つの遺跡として存在するものと判明した。ただし、遺跡の南西に位置する京塚a遺跡は縄文の遺物の外に、中世の陶器が普遍的に分布していることから、その範囲を京塚aとし、縄文期のみが分布する範囲を京塚cとあえて区分した。

[遺物] 縄文期の遺物としては、石器を中心としており、石範、剝片の外、磨耗した礫片が数点みられ、縄文前期末に位置するものと考えたい。なお遺跡の中心は、両者の遺跡が接合する舌状先端部と推測される。

[遺跡の範囲] 京塚aは、東西150m×南北200m、D、E、J～N、P、Qの範囲、京塚cは、東西70m×南北250m、B、C、F、Q～Sの範囲、合せて約47,500m<sup>2</sup>がその範囲と考えられる。

### 2. 大代原遺跡 [第6図 米沢市遺跡No.166]

大樽川の河岸段丘でゆるやかに曲した東西120m×南北450m、約54,000m<sup>2</sup>の細長く分布する遺跡である。その遺跡中央とみられる中には米澤市立三沢東部小学校が存在する。待って中心部を把握することは困難であるが、縁近くからは多量の石器（石錐、石範、石鎌、凹石など）が検出されている。範囲は、A～E、G～I、K、Lの中となる。

### 3. 吹屋敷、龍性院遺跡 [第7図 米沢市遺跡No.153, 154]

大樽川の浸食作用による舌状台地の吹屋敷遺跡と斜平丘陵から注がれる大沢川によって切断された対岸の龍性院遺跡の2遺跡が隣接して存在する。遺跡の時期及び年代はほぼ同一時期であり、縄文中期末葉（大木9、10式）と後続する縄文後期初頭（堀之内I、II式、加曾利B I式）の2時期が複合する遺跡である。遺物は、スクレイバー、石鎌、石錐、石範、石匙と多数の剝片、土

器片類が占める。なお、吹屋敷遺跡は、東西200m×南北250m、H～Oまでの約50,000m<sup>2</sup>、龍性院遺跡は、東西90m×南北350mの細長い遺跡であり、A～Gまでの約31,500m<sup>2</sup>である。

#### 4. 西明寺遺跡 [第8図 米沢市遺跡No.142]

羽山（標高534.1m）の天台修験の羽山信仰の拠点となった羽山山麓の直下墳籠から、旧松川河岸段丘にかけての、東西120m×南北300m、B～H、K、M～Pまでの、約36,000m<sup>2</sup>に分布する。主に石器を中心とした遺跡であり、ほぼ中心部は、縁辺中央部と思われる。石鏃、石箋、石匙、凹石など、多数これまでに検出されている。

#### 5. 桜神社遺跡 [第9図 米沢市遺跡No.143]

前述の西明寺遺跡とは、愛宕前沢を隔てた、北側山麓から河岸段丘にかけて、ほぼ椭円形状に存在する遺跡であり、石器を中心に縄文晩期の石器片が少量認められた。遺跡的には晩期の中葉に当たると推測され、大洞C<sup>1</sup>に属するものとみられる。石器としては、剥片を中心に、石箋、石匙、石鏃などが出土している。面積は東西200m×南北260mで、C～K、M～P、Rまでの範囲、約52,000m<sup>2</sup>である。

### 第3節 南原地区周辺の埋蔵文化財分布調査

本節の地域は、主に前述の『米沢の古代文化』でいうところの「松川流域」の遺跡群に係わるものである。「松川のかつての流路となる縁辺や河岸段丘には南原の大平地区から遠山村までの笹野丘陵山麓を中心に65の遺跡」が分布しており、中でも「館ノ内遺跡」は本市最初の学術調査をした記念すべき遺跡である。「笹野山遺跡群」は「笹野山から柄塙山にのびる山陵に分布する遺跡群」で、現在3ヶ所確認されている。この地域も、高校の移転進出、工場の建設、住宅団地の造成、西向沼の開発など変貌を余儀なくされている所であり、分布調査の対象とした。

#### 1. 笹野町遺跡 [第10図 米沢市遺跡No.138]

県道笹野、下矢来線沿いの金華薬師神社を中心とした丘陵先端部にかけて存在する。縄文晩期中葉の大洞B C、C<sup>1</sup>の土器片及び石器類が分布している。範囲面積は東西140m×南北140mで、C～F、H、Iまでの約19,600m<sup>2</sup>になる。

#### 2. 館ノ内C遺跡 [第11図 米沢市遺跡No.107]

中世の城館址の土壘が残っていた（平城）ことから調査した。縄文後期を中心として後期初頭の堀之内I、II式で、縄文中葉の、大木9、10式も存在する。遺物は、石鏃、石匙、凹石など。この東側はかつての松川の河岸段丘であり、それに沿って東西に分布している。東西220m南北240mで、D、F、G、I～V、X、Yまでの範囲、約52,800m<sup>2</sup>となる。

#### 3. 高山裏遺跡 [第12図 米沢市遺跡No.382]

斜平丘陵の墳墓に分布する遺跡であり、中心は不明であるが、東西230m×南北210mのほぼ卵形の、B～H、J～Mまでの範囲、約48,300m<sup>2</sup>に石器類が少量点在している。試掘調査の結果も様で、縄文期の例えれば、狩猟的なキャンプ地などの遺跡と思われる。

#### 4. 太田遺跡 [第13図 米沢市遺跡No.98]

縄文中期中葉、大木8a、8b式の土器片、石器（石鏃、石箋、石匙、凹石）などが出土している。熊野神社の北側50m位が、遺跡の中心地として、前述同時期の河岸段丘が発達。対岸には台ノ上遺跡（縄文前期、中期の集落跡）がある。かつての、松川河岸段丘であり、両岸に太田、台ノ上遺跡がある。西、東、南とも、ほぼ舌状の台状の台地を示している。東西190m×南北200mのやや南北に、A～C、F、G、I～Kまでの範囲で、約38,000m<sup>2</sup>である。西側は田であり、段丘下のため、遺跡はない判断した。

#### 5. 南原中学校遺跡 [第14図 米沢市遺跡No.219]

旧松川の河岸段丘の右岸にあり、南原中学校を中心として東西180m×南北430mで、A～I、K、M～P、R、Tまでの範囲、約77,400m<sup>2</sup>の広大な遺跡である。遺跡は、縄文中期末葉（大木9式）と同前期末葉（大木6式）の両方が共存する複合遺跡である。石器が多量に出土し、特に、石箋、凹石、スクレイバーなど広範囲に検出される。

#### 6. 坂下遺跡 [第15図 米沢市遺跡No.216]

戦国期末、伊達輝宗の家臣高橋筑前守秀行の居館であったとされる「高橋館」に関連する、中世の農村集落が存在していたと思われ、この時期の陶磁器が検出された。又、ここからは縄文後期（堀之内I式併行）の土器並びに石器片が大半を占めている。なお、「高橋館」は土取りのため破壊されている。範囲面積は、東西110m×南北180mで、D～F、H、I、Pまでの範囲、約19,800m<sup>2</sup>である。

#### 7. 前ノ在家遺跡 [第16図 米沢市遺跡No.128]

遺跡の中心に沿って、東西方向に分布している。年代は縄文中期前半（大木8a式）であり、遺物としては、土器の外に石箋、凹石などが検出されている。範囲面積は、東西170m、南北に110mで、B、E～Hまでの範囲、約18,700m<sup>2</sup>である。

#### 8. 大洞前遺跡 [第17図 米沢市遺跡No.125]

縄文中期中葉、李山丘陵から大洞部落に流下する沢の古扇状地と松川の左岸の河岸段丘が複合した、ゆるやかな微高地に分布する。

縄文中期（大木8a式）と、前期初頭（室浜式）の土器片が出土している。また、石器剝片も広範囲にわたって点在する。範囲としては、松川河岸段丘A～D、F～H、K～N、P、Q、S、Tの中に集中してみられた。東西150m×南北300mの不整の方形で、A～D、F～H、K～N、P、Q、S、Tまでの範囲、面積は約45,000m<sup>2</sup>である。

#### 9. 大洞遺跡〔第18図 米沢市遺跡No.124〕

李山丘陵から流下する沢を中心に両側に沿って細長く存在する遺跡であり、東西100m×南北300m、A～C、E～N、P、Qまでの範囲約30,000m<sup>2</sup>を有する。大洞館（多々木左馬頭、伊達家の家臣）の居館があったと伝えられている。遺跡の範囲内には、明確な土壘、溝などの遺構は見当らないが、中世の陶器片が広範囲に分布する。また、熊野神社、及び宝善寺の裏手の山嶺には、大規模な山城が南北約1kmにわたって点在しており、大洞館の居館との関連が重視されている。それらを裏付けるように、現在でもこの遺跡の近辺の部落には、前ノ在家、中ノ在家、銭子屋敷などの小字名が残っている。

#### 10. 丹南遺跡〔第19図 米沢市遺跡No.121〕

松川の蛇行によって、舌状台地に張り出しているところから、県道までを一応、遺跡の範囲とする。南原小学校の西北側の段丘を中心として、縄文晩期（大洞B C、大洞C<sup>1</sup>、C<sup>2</sup>式）と、後期中葉の関東の大曾利B I、B II式、そして分校の南東部の段丘は、縄文中期中葉から同末葉で、編年でいうところの大木8 b、9 a式を中心として複合している。

昭和39年に、加藤 稔氏が調査団長となり、私立米沢女子高を中心として発掘調査を実施し、住居址の一部と思われる石組の炉2基が検出されている。遺跡の範囲は東西210m×南北310mで、B～L、N～Qまでの約65,100m<sup>2</sup>となる。

#### 11. 桁窪a遺跡〔第20図 米沢市遺跡No.281〕

帷野山テレビ塔から桿窪山にのびる山腹に分布する遺跡群の一つである。山頂の自然窪地状の湖（沼）岸を中心としたこの桿窪a遺跡のはかに、北に向って、桿窪b、桿窪cの2遺跡がある。今も水量を保っているのは桿窪山に存在する西向沼で、沼の縁辺に沿って縄文前期の遺跡がある。

桿窪b遺跡は沼の縁辺に位置し、黄褐色粘土層から剥片を中心多くに石器が出土する。すべてが剥片であり、ローム（粘土）層から出土することと、土器が認められないことから、旧石器にさかのほる可能性を秘めている遺跡である。

ここに、本市農林課の「新林業構造改善事業」の一環として、市民の「いこいの広場」が計画されている。将来、遺跡に及ぶ場合正式な発掘調査を実施し、遺跡の性格を解明する予定である。



第20図 桁窪a遺跡分布範囲図

## 第4節 八幡塚古墳

### I 遺跡の概要

本遺跡は米沢市窟田町窟田字八幡堂2,934他に所在する。米沢市街地の最北端に位置し、隣接する高畠町との行政区域境近くにある。付近一帯は昭和48年頃から工業地域として開発され、窟田工業団地の名称で呼ばれている。八幡塚古墳はその工業団地を区画する市道の北側にあり、20m位を有する塚上にはうっすらとした杉林の木立に囲まれて八幡神社が祀られている。

古墳はその八幡神社境内と隣接する宅地内まで一部含んでいる。地元の話によれば、窟田工業団地造成以前にも当古墳と同様な塚が、いくつか存在したと言う。八幡塚古墳の北側から東側の湖岸段丘（旧白竜湖の浸食段丘）上には、窟田地区内では唯一の縄文中期の「戸の内」遺跡が分布しており、昭和三十年頃に施行された市道工事の際に完形土器1点が検出されている。

さらに東側に移行すると、一辺15m位の方墳、窟田古墳や中世期の白山神社塚群、西は国道13号線を境に約500mほど離れた水田内には、山形県下最古と想定される前方後方墳「寶領塚古墳」が分布している。縄文期は別にしても、八幡塚古墳、窟田古墳、寶領塚古墳それに開発によって破壊された塚（10基相当）も古墳の可能性が強いことからすれば、八幡塚古墳を中心とする1km四方の一帯は平地型古墳の群集地帯の可能性もある。

### II 調査の方法と調査経過

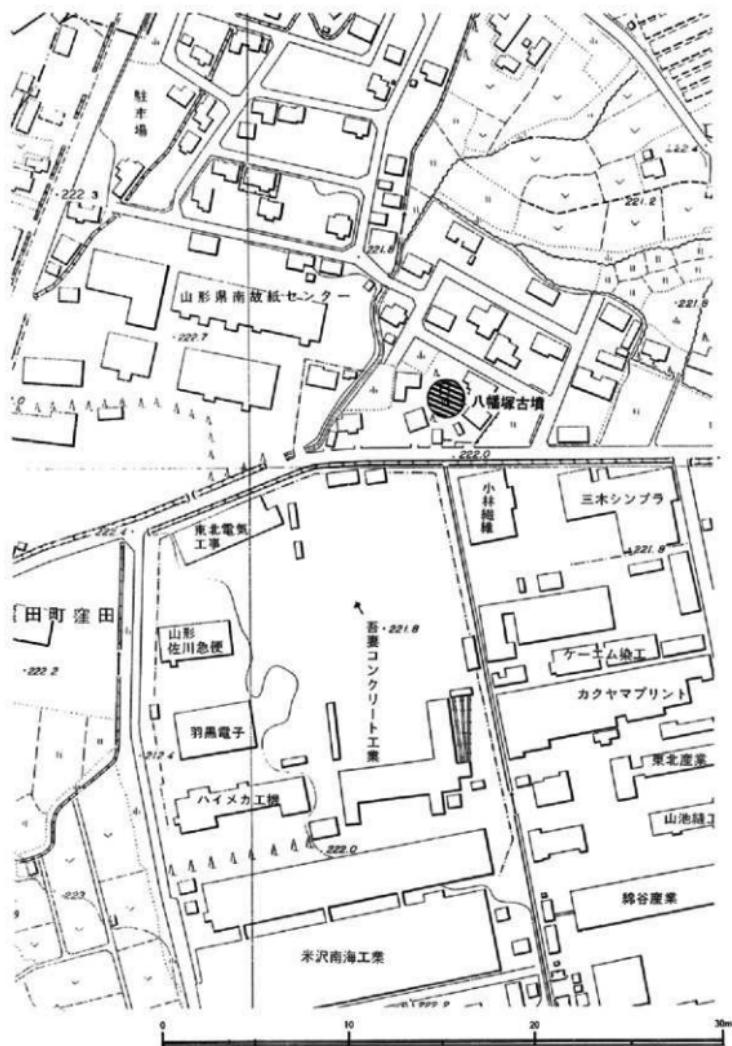
八幡塚古墳は、昭和60年の分布調査で考古学研究グループ「まんぎり会」によって発見されたものである。発見当初から墳丘上の形状から推測し、二段構築を有する円墳もしくは帆立貝式古墳ないし、前方部が破壊された可能性のある前方後円墳ではないかと考えられてきた。今回の調査もその点を重視しているが、特に古墳が宅地に隣接しており、北側の空地に宅地造成の計画があることから明確な範囲と古墳の有無を把握する目的で進めてきた。

調査は第1に古墳の全体像を探るための測量調査、第2に古墳の範囲及び周溝の確認、第3に葺石等の外部施設の確認の順で行うこととした。

先の測量調査は主軸の基本線を真北に設定し、十字トラバース法を用いることにした。トラバースの基点は主に墳丘上に配し、T 1～T 13の13基点を設し、縮尺百分の1で作図した。

次の範囲確認及び周溝の有無は、墳丘の縁片から外に向う形でトレンチを配する方法を用い、宅地が密集して調査が困難な東側と南側、西側の一部を除き、A～Gトレンチの7ヶ所を設定した（第23図参照）。この中で造り出し（この場合かならずしも適切な用語とは言えない）を有する西側部に関しては、2ヶ所の拡張部（E・Dトレンチ）と1mのFトレンチを設けている他はすべて2mトレンチを基本とした。

最後の墳丘上の調査は西側の造り出し部分を中心にT 2とT 3・T 8からの延長線を結んだ範



第21図 八幡塚古墳周辺の地形図

囲を限定して行なった。

調査期間は次の通りとなる（作業は一部併行）。

- ・測量調査、トラバース設定、墳丘清掃 6月4日～6月20日
- ・トレーニング調査、拡張部の発掘 6月21日～7月11日
- ・墳丘調査、表土剥離 7月11日～7月14日
- ・調査箇所の平面図、セクション図作成、写真撮影 7月15日～7月20日
- ・埋めもどし 7月20日～7月22日

### III 調査の状況

ここでは測量調査、トレーニング調査、墳丘調査の三調査で得た成果を簡単に述べてみたい。

#### 1) 测量調査 [第22図・第23図]

測量は基点となるトラバース基点から、墳丘全体に測点を配し、20cmコンタを基本とする測量を行なった。より正確さを記すため、墳丘上の雑木、草根、落葉等を除去し、現状で把握される墳丘内の有段状況を図化した。測点は比高差30cm前後を基準にして、墳丘から墳麓部までNo.1～No.662の662測点を用いた。調査の結果、墳丘は測量段階で、南北26.7m・東西26.2mの円形プランを示す墳丘であり、西側や北側(W-20°-N)方向に造り出し的な前方部を有している。また南西部を除く、北西側から東側にかけて墳麓線より1～1.7mの段をなしていることが判明した。従って、本八幡塚古墳は2段築成の古墳であり、2段目のテラスが西側で1段目に接続(接合して開く)して前方部を構成する特異な円墳とすべきであろう。詳しくは後で述べるが、便宜的に仮に前方後円墳と同じ用語を用いて説明を加えれば、後円部(円墳頂の平坦面)頂は八幡神社の遷座によって削平されたらしく、全体的に北から南側にかけて傾斜し、石段方向に土砂の流入がみられる。墳丘も戦前、戦後の杉の移植や伐採が影響し、整然としていない。

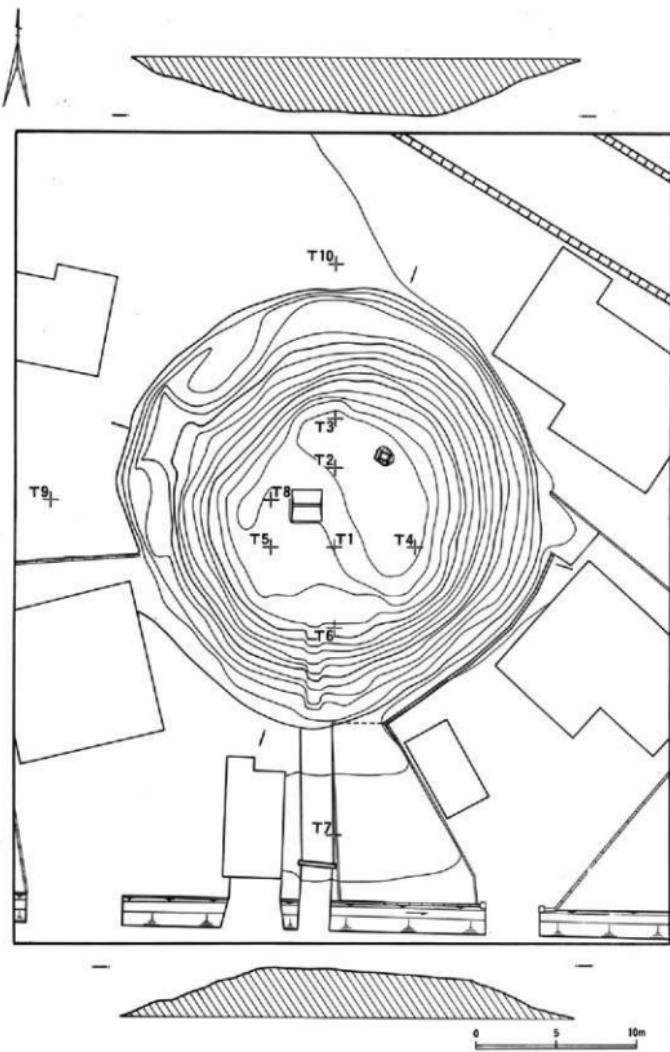
さらに神社の石段から南西の墳麓部も宅地開発によって削られたものと推測され、墳丘の2段目まで破壊を受けている。それらを裏付けるかの様に、古墳(神社境界線)との境には宅地開発の際に設置された境界用ブロックが古墳を全周している。

なお、墳丘の高さとしては、トラバース基点のT2付近が最も高く、標高226.01m、北側から西側の墳麓部で222.75mを測り、墳丘上の比高差は3.26mを示す。また2段目は北側で1m、前方部状の上で1.5mを有し、墳頂部からの比高は2段が2.26m、前方部状の墳頂で1.76mとなっている。

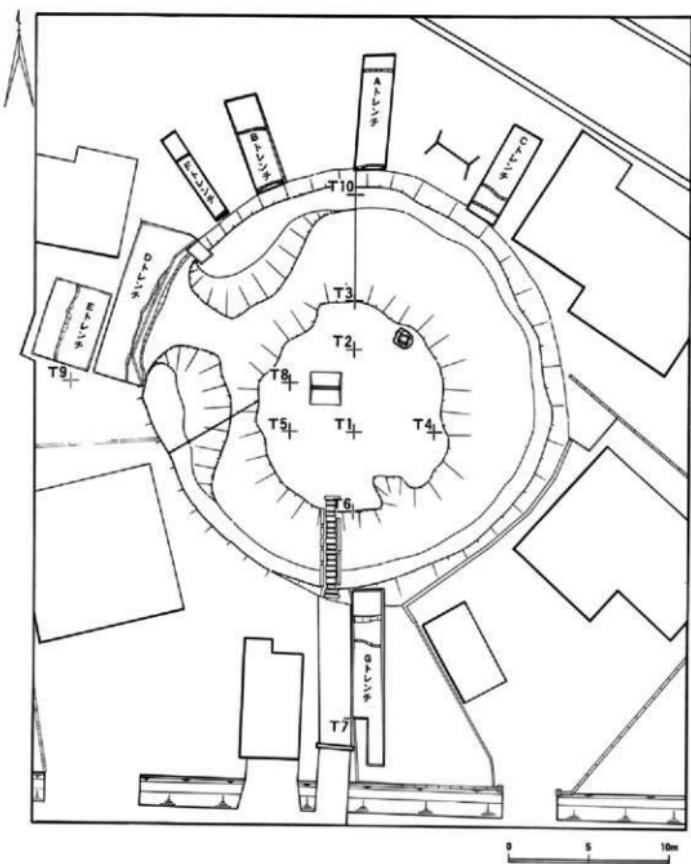
#### 2) トレーニング調査 [第23図～第30図]

宅地以外の空間に沿ってA～Gの7本のトレーニングを設置して、調査を行なった。以下各トレーニングについて説明を加える。

##### A トレーニング [第24図]



第22図 八幡塚古墳測量図



第23図 八幡塚古墳平面図（トレンチ配図）

トランバース基点のT10を基準に古墳の墳麓線から北方向にかけて2m×7mのトレンチを設定した。Aトレンチを含めた古墳北側一帯は宅地分譲の際に重機が入って削平や盛土を行なった範囲でもあり、擾乱層を取り除く作業から開始した。以下、述べる各トレンチの調査も同様で、擾乱層を除去した段階で精査し、遺構を確認することにした。

本トレンチは北で20cm、南の墳麓線辺で30cmの破壊を受けていた。表土から35cm位掘り下げた段階で古墳の周溝と考えられる落ち込み部分がトレンチの両端に検出された。調査した結果は確認面からの長さで幅5.8m、中央南壁よりの最深部で80cm、テラス状の平坦面を有する北壁が28cm、南壁で50cmと全体的に浅い周溝であることが判った。溝内の層序は11枚を有し、底面に近い層は粘質もしくは泥質シルト、中間層は黒褐色シルト、上部は微砂質土層に区分される。

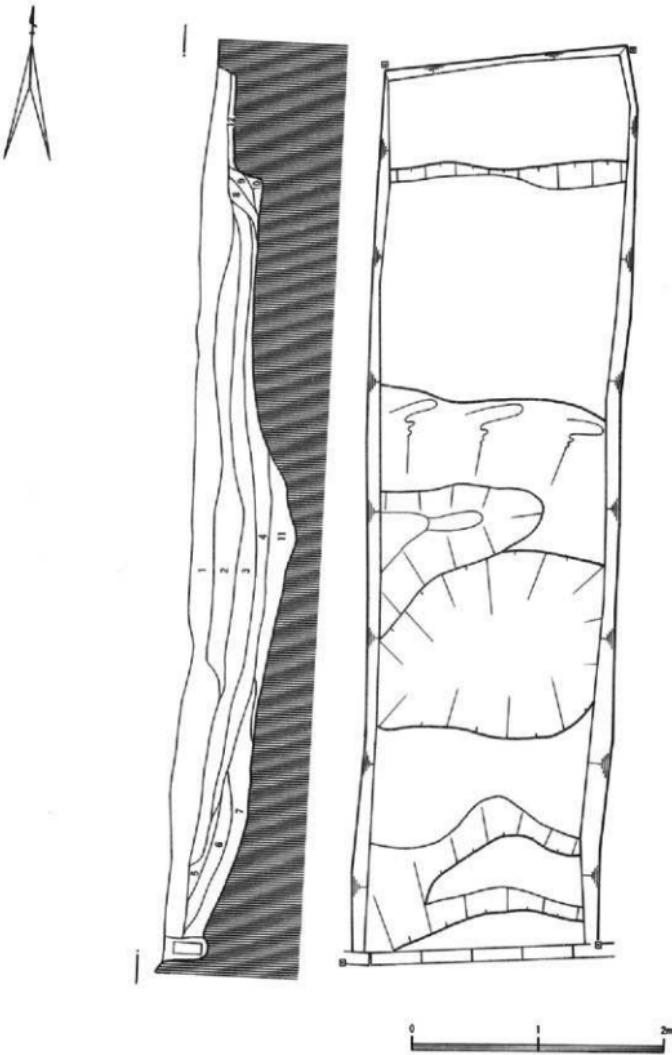
第2表 Aトレンチ土層分類表

| 堆積層 | 土 色              | 土性・土質 | 備 考          |
|-----|------------------|-------|--------------|
| 1層  | 黒褐色土             |       | 擾乱層          |
| 2層  | 黒褐色 (10Y R 2/2)  | 黑色土   |              |
| 3層  | 黒褐色 (10Y R 3/2)  | 微砂質土  |              |
| 4層  | 暗褐色 (10Y R 3/4)  | 粘質擾乱土 | 多量の炭化物を含む    |
| 5層  | 黒褐色 (10Y R 3/2)  | 泥質土   |              |
| 6層  | 黒褐色 (10Y R 2/3)  | 泥質シルト | 小量の木炭粒を含む    |
| 7層  | 暗褐色 (10Y R 3/4)  | シルト   | 多量の微砂を含む     |
| 8層  | 暗褐色 (10Y R 3/3)  | 微砂質土  |              |
| 9層  | 黒褐色 (7.5Y R 3/2) | 粘質シルト |              |
| 10層 | 黒褐色 (10Y R 3/2)  | 粘質シルト |              |
| 11層 | 黒褐色 (10Y R 2/3)  | 粘質土   | 有機質の物質を多量に含む |

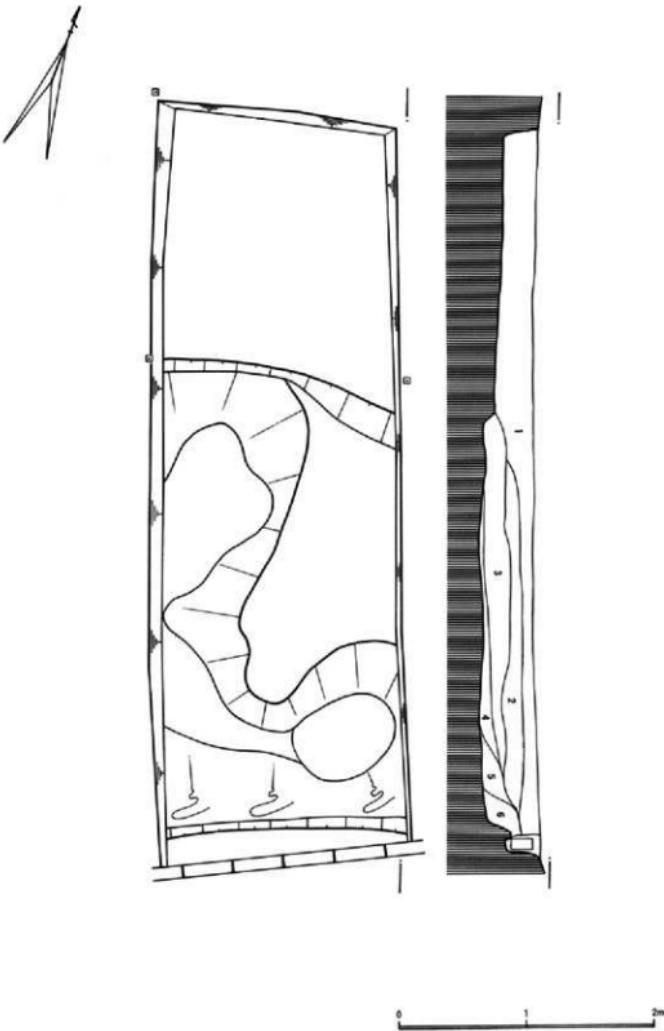
遺物は堆積層の4層を中心に5層、6層、7層、最下層の11層まで認められ、トレンチ内では最も多い209点が検出されている。遺物の大半は土器器の小破片によるものであり、磨滅が著しく器形が明確に判別されるものは含まれていないが、壺形ないし壺形土器の胴部片と若干の壺が含まれているようである。

#### Bトレンチ (第25図)

Aトレンチの西側4.5mに同様に設定した。重機による破壊が地山まで及んでおり、擾乱層を25cmほど除去した段階で周溝が確認された。溝幅は最大で3.7m、深さは墳麓道下で25cm、北側で15cmをなす。底面は3~5cm位の浅い皿状の落ち込みがみられたが、これらはAトレンチと同様であるが、溝を掘り下げた際の痕跡と考えられる。層序は6枚で古墳の墳麓側から自然堆積している様子がみられた。



第24図 八幡塚古墳Gトレンチ平面図



第25図 八幡塚古墳Bトレンチ平面図

第3表 Bトレンチ土層分類表

| 堆積層 | 土 色              | 土性・土質  | 備 考       |
|-----|------------------|--------|-----------|
| 1層  | 黒褐色土             |        |           |
| 2層  | 黒褐色 (7.5Y R 3/2) | 微砂質土   |           |
| 3層  | 黒褐色 (10Y R 3/2)  | 微砂質シルト |           |
| 4層  | 黒褐色 (10Y R 2/2)  | 微砂質シルト |           |
| 5層  | 黒褐色 (10Y R 3/2)  | 泥質シルト  | 微量の木炭粒を含む |
| 6層  | 黒褐色 (10Y R 2/3)  | 泥質土    |           |

遺物は土師器の細片が3層～6層にかけて76点認められた。その中で第33図1は6層下部より検出した壺形土器の口縁部であり、内外面ともにハケ目調整を施している。他は壺形土器、塊形土器、壺形土器の破片で占められている。

#### Cトレンチ (第26図)

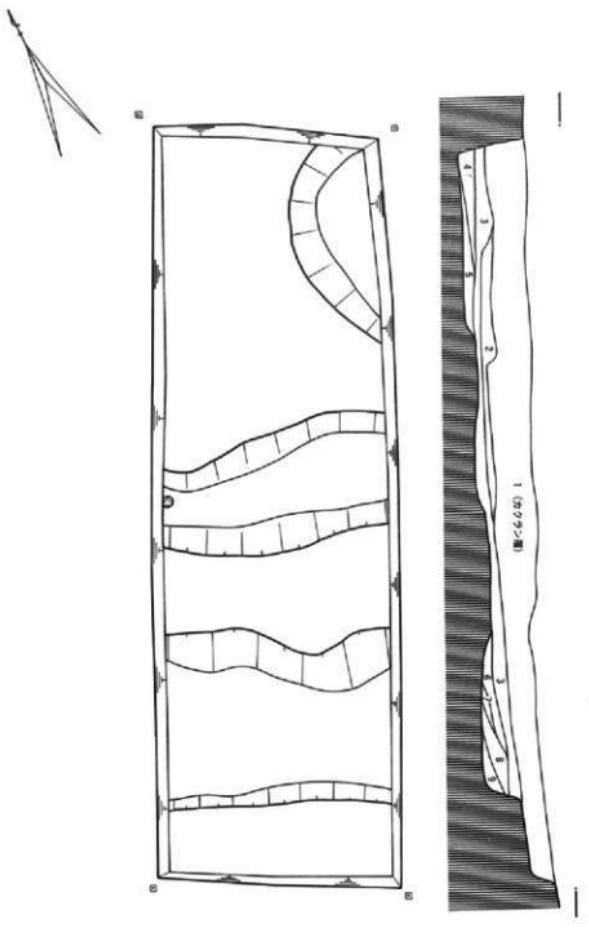
Aトレンチの東側、宅地と接して $2 \times 6$ mのトレンチを設けた。トレンチの北東コーナー部に円形状の土壘と中央に浅い溝状造構、更に埴籠下に沿って幅1.4m、深さ28cmの溝状造構が検出されている。古墳の周溝に伴うものは南壁から確認された溝とみられる。溝内の堆積層は3層と6層～9層5枚であり、泥質もしくは泥炭質を有する特徴がある。遺物はこの溝内8層、9層内から土師器の小破片12点が検出したにすぎない。

第4表 Cトレンチ土層分類表

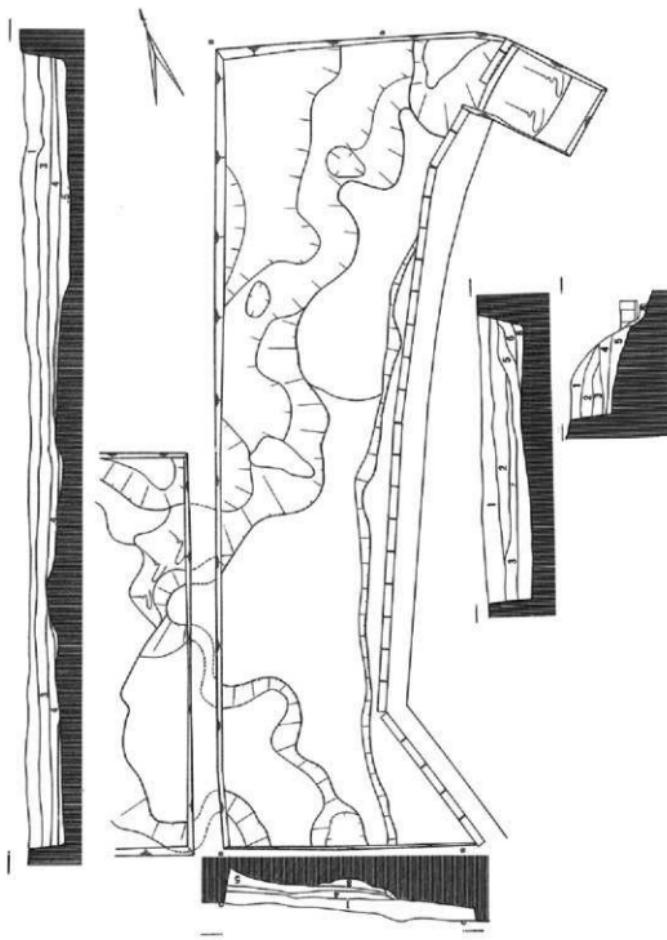
| 堆積層 | 土 色             | 土性・土質  | 備 考            |
|-----|-----------------|--------|----------------|
| 1層  | 黒褐色土            |        |                |
| 2層  | 黒褐色 (10Y R 3/2) | 黒土     |                |
| 3層  | 黒褐色 (10Y R 2/2) | 泥質土    | 黄褐色粘土をブロック状に含む |
| 4層  | 黒褐色 (10Y R 2/3) | 泥質土    | 小量の木炭と微砂質土を含む  |
| 5層  | 黒色 (10Y R 2/1)  | 粘質土    |                |
| 6層  | 黒色 (7.5Y R 2/1) | 泥炭     | 微量の砂質土を含む      |
| 7層  | 黒褐色 (10Y R 2/2) | 泥炭     |                |
| 8層  | 暗褐色 (10Y R 3/3) | 微砂質シルト |                |
| 9層  | 黒褐色 (10Y R 3/2) | 泥質土    | 微量の木炭粒を含む      |

#### D・Eトレンチ (第27図、第28図)

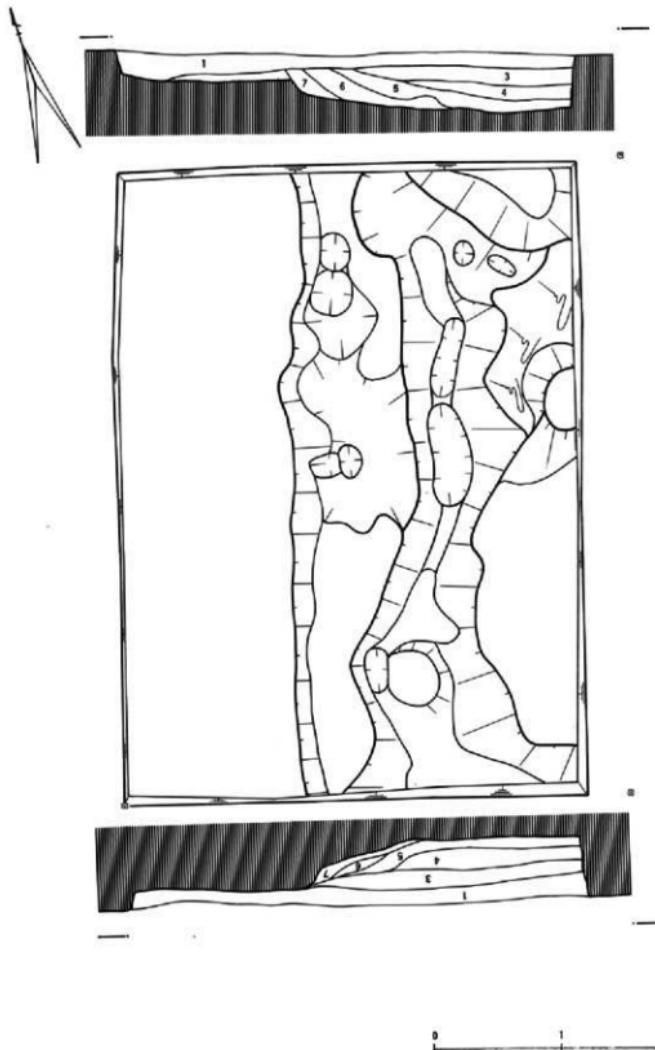
当初から八幡塚古墳が前方後円墳ではないかとの推測があった。前方部状の張り出し部が更に西にのびていた可能性も考慮して、西側に隣接する宅地の空間と空間とを利用し、張り出し部に当る墳丘直下に $3 \times 10$ mのDトレンチを配した。本トレンチ付近は盛土箇所となっていたこと



第26図 八幡塚古墳Cトレンチ平面図



第27図 八幡塚古墳D トレンチ平面図



第28図 八幡塚古墳Eトレンチ平面図

もあり、墳丘縁片に沿って埋設されたブロックによって一部破壊されてはいたが、トレンチを完掘した段階で墳丘下に周溝が認められたことから、むしろ特異な円墳状を有する可能性が濃厚になってきた。そこで周溝の対岸となる西側の溝を確認するために4m×5mのEトレンチを更に設定する。

この両者のトレンチの発掘によってEトレンチ内での周溝は、幅5.2~6.6mを有することが判った。宅地の範囲内もおそらく同様な幅を有するものと考えられる。溝は古墳の対岸が深く40cm前後を測るが、墳丘下はなだらかで壁下で20cm前後である。堆積土層は盛土による第1層を除けばD・Eトレンチ内で9枚を数え、泥質及びシルト層を示すものが中心であった。

第5表 D・Eトレンチ土層分類表

| 堆積層 | 土 色           | 土性・土質  | 備 考          |
|-----|---------------|--------|--------------|
| 1層  | 黒褐色土          |        | 擾乱層(土盛)      |
| 2層  | 黒褐色(10YR 3/2) | 泥質シルト  | 微砂質土を含む      |
| 3層  | 黒褐色(10YR 2/3) | 微砂質シルト |              |
| 4層  | 黒褐色(10YR 3/2) | 泥質シルト  |              |
| 5層  | 黒褐色(10YR 2/2) | 泥質土    |              |
| 6層  | 暗褐色(10YR 3/4) | 粘質土    | 小量の木炭粒を含む    |
| 7層  | 暗褐色(10YR 3/3) | 泥炭     | 微量の木炭粒を含む    |
| 8層  | 黒褐色(10YR 3/2) | 粘土     | 泥質土をブロック状に含む |
| 9層  | 褐色(7.5YR 4/3) | シルト    |              |

遺物は比較的少なく、最大層を主体にDトレンチが55点、Eトレンチが4点の59点が認められている。いずれも土師器の小破片であり、第33図1~4に示した変形土器、壺、壺形土器の口縁部の他、壺形土器や底部片、それに縄文時代の石器第48図86の1点も検出している。

#### Fトレンチ(第29図)

BトレンチからDトレンチに周溝がどの様に進むかを確認する目的であることから、敢て1m×6mにし、両トレンチの中間を埋める形で設定した。周溝は非常に浅く、北で15cm、南の壁下で20cmを有し、幅は4.2mをなす。埋土の基本層序は7枚で、両壁に沿った堆積状況が認められた(第6表参照)。遺物は土師器変形土器の破片が7点認められたにすぎない。

#### Gトレンチ(第30図)

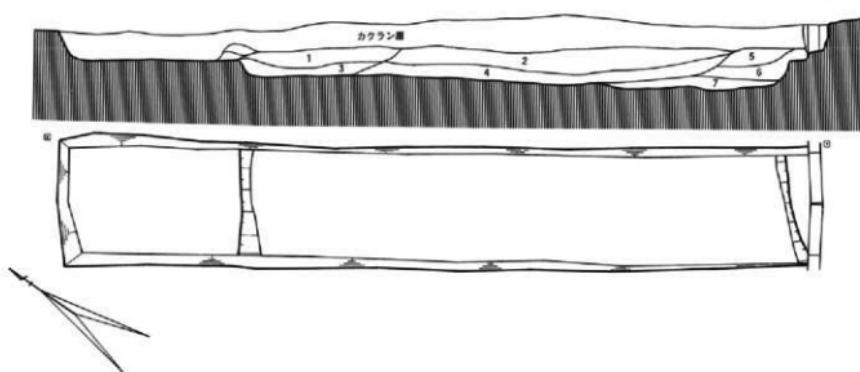
トラバース基点に沿って古墳の南側に配した唯一のトレンチである。墳丘の一部から南に2m×8mを設定したが、後で更に1m×3mを配し、全長11mのトレンチを調査した。墳丘の表土を20cm削離した結果、すぐに地山が表出し、削り取る様な形で周溝を掘り下げていることが判った。このことは、古墳の南側付近の一部が古墳構築以前に低い高まり部分が存在していることを

第6表 Fトレンチ土層分類表

| 堆積層 | 土色                 | 土性・土質  | 備考        |
|-----|--------------------|--------|-----------|
| 1 層 | 黒褐色 (10Y R 2/2)    | 黒土     |           |
| 2 層 | 黒褐色 (10Y R 2/3)    | 微砂質シルト |           |
| 3 層 | 黒褐色 (10Y R 2/2)    | 泥質シルト  |           |
| 4 層 | 黒褐色 (5 Y R 2/1)    | 泥質微砂土  |           |
| 5 層 | 黒褐色 (10Y R 3/2)    | 微砂質シルト |           |
| 6 層 | 黒褐色 (10Y R 2/3)    | 泥質土    |           |
| 7 層 | にぶい黄褐色 (10Y R 4/3) | 粘質土    | 微量の木炭粒を含む |



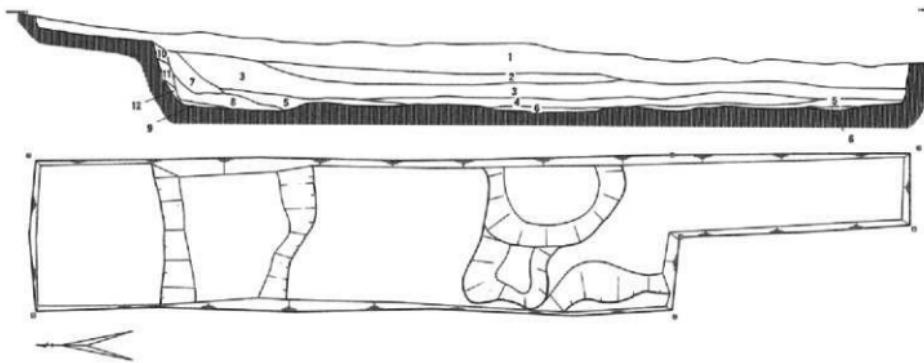
- 37 -



第29図 八幡冢古墳Fトレンチ平面図

第7表 Gトレント層分類表

| 堆積層  | 土色                | 土性・土質  | 備考           |
|------|-------------------|--------|--------------|
| 1 層  | 暗褐色 (10 Y R 3/3)  | 微砂質シルト |              |
| 2 層  | 黒色 (7.5 Y R 2/1)  | 微砂質シルト |              |
| 3 層  | 黒褐色 (10 Y R 2/2)  | 泥質シルト  |              |
| 4 層  | 黒褐色 (7.5 Y R 3/2) | 泥質シルト  |              |
| 5 層  | 黒色 (10 Y R 2/1)   | 泥炭     |              |
| 6 層  | 黒褐色 (10 Y R 2/3)  | 泥質土    |              |
| 7 層  | 黒褐色 (10 Y R 3/2)  | 泥質シルト  | 少量の砂を含む      |
| 8 層  | 暗褐色 (10 Y R 3/4)  | シルト    |              |
| 9 層  | 褐色 (7.5 Y R 4/3)  | 微砂粘質土  |              |
| 10 層 | 黒褐色 (7.5 Y R 2/2) | 泥質土    |              |
| 11 層 | 暗赤褐色 (5 Y R 3/2)  | 泥質土    | 微量の微砂と木炭粒を含む |
| 12 層 | 暗褐色 (7.5 Y R 3/4) | 粘質土    | 微砂を少量含む      |



意味し、その高まり（自然堤防か微高台地）を利用して古墳を築成したものと考えられる。既に先述した様に旧白竜湖の湖岸段丘を利用したのかもしれない。従って、墳丘側の溝の深さは76cmを測るが、南壁は17cmにすぎなかった。またトレンチ内のほぼ中央部にも不自然な浅い落ち込みが存在するが不明である。トレンチ内の基本層序は第1層の表土を含む第1～6層の6枚で、他に第7層～12層は周溝内に堆積したものである。

遺物は1点も検出されなかった。

### 3) 墳丘の調査 (第31図、第32図)

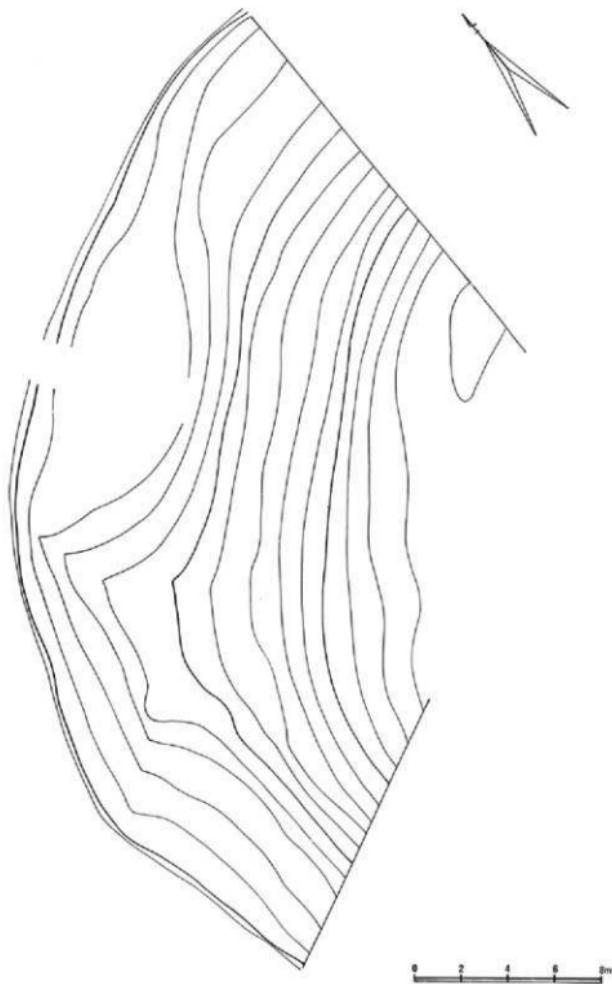
T 3からT 10とT 8から宅地のコーナー部を結んだ扇状の範囲を調査区に設定した。特に前方部状の張り出しを有する箇所を重点に表土を除去し、精査を行なった結果、前方部状の一帯に3～15cm位の小円碟が墳丘に貼り付けた状態で確認された。前方部状を有するくびれ部やその上端部は特に顕著であり、意図的なものと理解できる。こういった施設は仮に葺石と呼ぶべきであろうが、全国各地で検出されている所謂「ふき石」と比較すれば、碟の大きさや規則性に欠けるものであり安直に結論を出すわけにはいかない。山形県内では現在葺石の存在は上山市土矢倉古墳以外は確認されていない、当八幡塚古墳の碟群の意図は少なくとも葺石を意識したことは十分ありうると思われるものであり、今後山形県内の古墳研究を進める中の課題としておきたい。

遺物としては土師器片6点が認められている。

## IV 出土遺物

今回の八幡塚古墳から検出された遺物は、トレンチ出土と墳丘出土を合わせた369点が認められている。その大半はトレンチ内からによるもので、特にA・Bトレンチと前方部状を呈するDトレンチ内からの検出が圧倒的に多い特徴がある。また検出される層位も周溝内部の底とその直上に集中しており、このことは古墳が構築された直後からあまり時間のたたない時点に、何らかの形で流入したものとみられる。

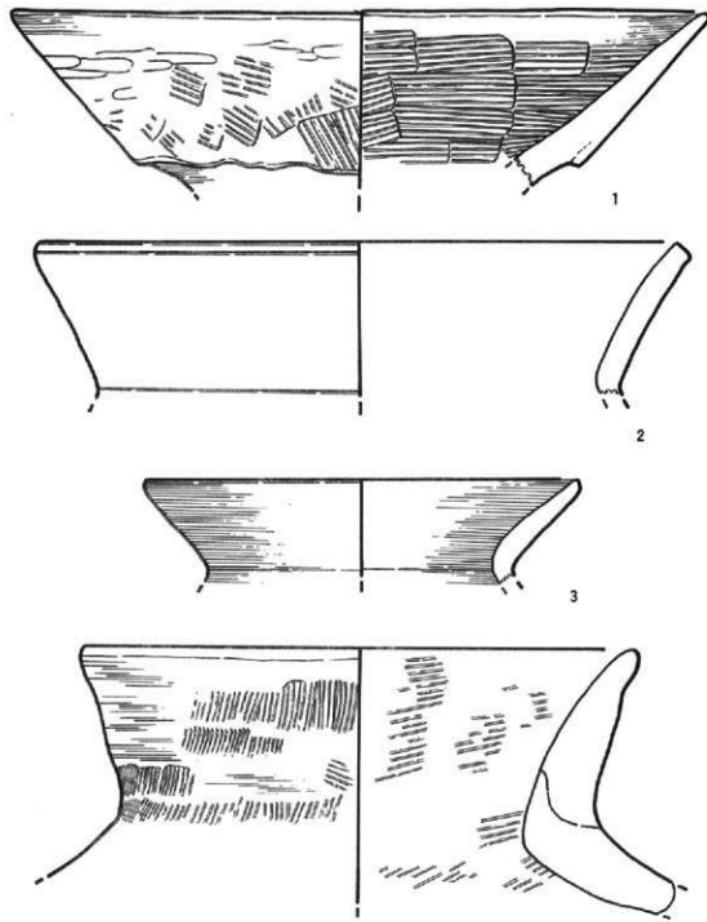
よって出土した遺物は、少なくとも古墳構築に近い時期の年代を示すものもある。ただ遺物の多くは小破片で磨滅も著しく、判然としないのが残念である。第33図に示した4点の実測図も破片から復元したものであるが、1は外面調整を横のナデからミガキその後に横及び斜位のハケ目を施し、内外はナデとハケ目を有する壺形土器と考えられるものである。口縁部が大きく開き二重口縁から頸部がすさまる特徴は、米沢市の大清水遺跡出土の壺形土器（塙釜式）に類似し、2は甕の口縁部、3は口の広い壠、4は口縁部が直立する壺形土器と考えられるが、2～4は同じ遺物でも5世紀前半のニタ侯遺跡の一括資料に近いといった特徴をもっている。また2の口縁部が「」字状を示すものとしては、米沢市の比丘尼平遺跡の壺形土器に近いものもあり、年代決定の決め手を欠くが、あえて新しい要素を取り入れて述べれば、雨小泉式併行としておくのが妥当と思える。従って八幡塚古墳の年代は5世紀前半頃となろう。



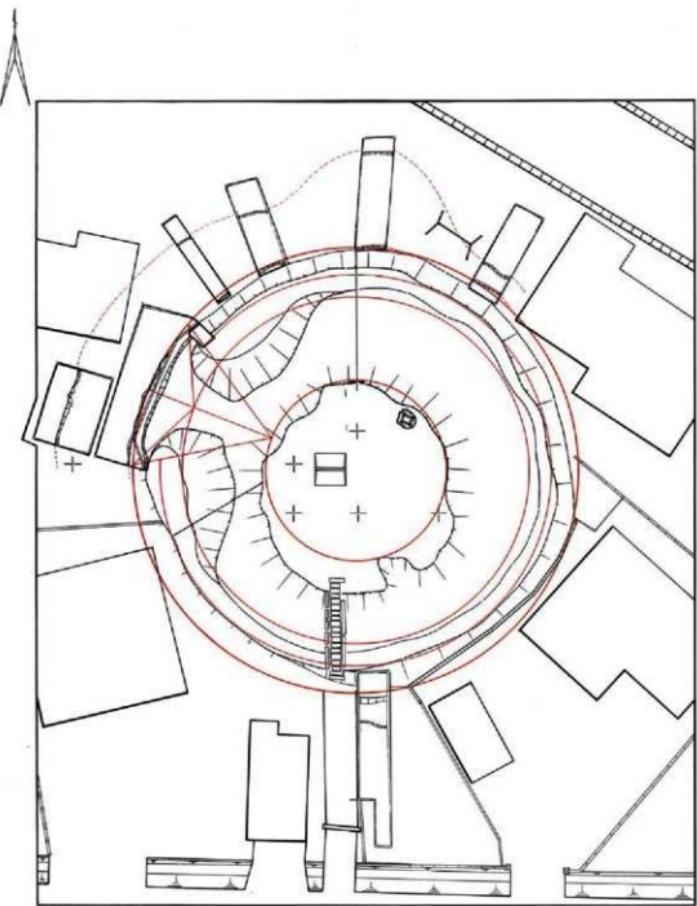
第31図 八幡塚古墳造り出し部分測量図



第32図 八幡塚古墳造り出し部分平面図



第33图 八幡塚古墳出土土器実測図



第34図 八幡塚古墳復元図部分平面図

## V 八幡塚古墳の復元と形態

これまでトレンチ調査状況、墳丘調査、出土遺物と述べてきたが、ここでは今回の調査で明確となった成果を検討し、八幡塚古墳の全体像を探って行きたい。

### 1) 周溝

周溝は外周部分が不規則ながらも、今回確認した状況から判断すれば、ほぼ全周するとみられる。若干は宅地造成等によって破壊された部分もあるが、墳丘の墳麓に沿って検出したラインを結べば第34図に示した様に27.6mの正円内におさまることから27.6m位を中心とした尺度で築造されたものと考えることがまず可能である。第2に前方部状の張り出し部分から、Aトレンチまでは3.7m～6.6mと周溝の幅が広く掘られているが、Cトレンチになると急速に狭くなりGトレンチも同様に極端に狭くなることが判った。このことは先に表現した前方部状の張り出し面を相当意識し、張り出し面を中心とした古墳の半分位の周溝を意図的に広く構築したと理解されよう。また同墳丘上に貼り付けた礫群もそれらを裏付けるものであろうし、これらの特徴は前方後円墳や初期の帆立貝式古墳等にも共通するもので、前方後円墳との結び付きや、帆立貝式古墳の出現や発展を推測する上でも注目される現象と考えられる。

### 2) 墳丘の復元

周溝から算定した数値を当てはめ、更に検当して八幡塚古墳の墳丘をみてみよう。問題はあるが、前方部状の張り出し部を前方後円墳の用語を用いてあえて述べると、調査した結果、前方部幅が9mとなり、その中間から中軸線を割り出し、前方部長を測ると3mになる。前方部長は前方部頂点と接し、墳丘の墳頂基点（0点）から前方部頂点に円を描くと21.5mの円内に後円部の2段目の墳麓に一致する。更にその外面には1.5mの段を有し、前方部のくびれ部で接合する形となる。墳頂部の径は神社の石段の際に崩した部分を引き円を結べば約11mを有していたものと判断されるのではないか。更に大胆に前方後円と同じ計測値として参考のために（念のため）数値を示せば、次の様になる。但し比較するため、米沢盆地内の代表とされる戸塚山137号墳・帆立貝式古墳も次いで加えておく。

第8表 戸塚山137号墳・八幡塚古墳計測値

|          | 主軸長  | 後円径 | 後円高    | 前方長 | 前方幅 | 前方高 | 後円頂径 | 後円二段頂径 | 後円二段頂高 |
|----------|------|-----|--------|-----|-----|-----|------|--------|--------|
| 戸塚山137号墳 | 24   | 21  | 2.8    | 3   | 9   | 1.5 | 9    | 18     | 1.2    |
| 八幡塚古墳    | 27.6 | 24  | (3.26) | 3   | 9   | 1.5 | 11   | 21.5   | 1.2    |

となるが、偶然かもしれないがかなり数値に近いものがある。しつこい様だが更に念を押すと当古墳は帆立貝式古墳にはならない。もちろんそうすれば前方後円墳の用語を当てはめることすら邪道と言わねばならないが、戸塚山137号墳に近い数値を示すことや、帆立貝式古墳発生に重要な手掛りを有する可能性があることも吟味して、敢て使用したことを付け加えておく。

## V まとめ

今回の八幡塚古墳は測量調査と周溝、墳丘の上部施設調査として実施したものであったが、古墳の形態が帆立貝式古墳に類似する特異な円墳であることや、古墳の年代が5世紀前半に溯ることが判明した。当初は中期中葉から後期前半に位置付けていただけに、その成果は大きいと言わねばならない。

八幡塚古墳も含めた米沢盆地内における大形古墳の研究は、南陽市稻荷森古墳の発見から始まったと言える。その後、戸塚山139号前方後円墳が確認されてからは両者との年代的な位置が問題にされた時代もあった。更に川西町から県内初の前方後方墳が発見されるに至っては、天神森→稻荷森→戸塚山139号墳といった時代変遷の中で米沢盆地の古墳文化の成立や動行を米沢盆地に符合させ、一盆地一支配という概念的な構想の試案がなされたものであった。だが、その後、川西町下小松古墳群や南陽市経塚山塚群、竜樹山塚群、別所山塚群等の山頂や尾根に沿って前方後円墳や同後方墳、方墳、円墳が群集する古墳群や塚群が発見されるに至っては、米沢盆地内の古墳発生とその展開を地域的な政治集団の中で捉えようとする向きもでてきた。

又、古墳のみを重視する方向を懇意する論考とし、山岳信仰の発達から必然的に古墳群と共に存する墳墓や経塚、修法塚等の古代中世塚群がかなり多く存在することを指摘する考え方も出現する。

事実、昭和62年に発掘調査を実施した白鷹町笠松山塚の前方後円形塚と前方後方形塚の両者からは、12世紀代の経筒が検出されている。従って、山頂や尾根に存在する前方後円（方）形や、方形、円形状の塚が全て古墳に結び付くという考えには大きな誤りを生ずる危険性を改めて示したものと言える。

さて、前に戻るが、昭和61年には米沢盆地で2つ目となる大形の前方後方墳、竜頭塚古墳が発見された。更に隣接して八幡塚古墳、窪田古墳と沖積平野に出現したことによって、古墳発生期から成立、発展段階での一盆地一支配（首長）とする従来の推論では解決できない状況にある。

しかもこれまでに古墳の年代を推定する根拠とした形態論や立地的条件も川西町天神森古墳、稻荷森古墳等の発掘調査等によって、5世紀代の成立から4世紀段階の成立として把握せざるを得なくなってきた。しかも米沢盆地に存在する大形古墳が同一時期に近い中で集中する事實を踏まえると、地域的な政治集団を区分し、米沢盆地全体の中で古墳発生と成立、発展を考える方向にあり、新事実が発掘調査等によって相次いだ事から最近は慎重になってきている。

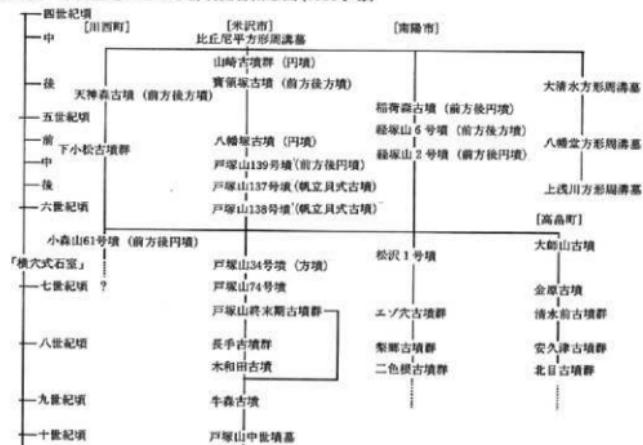
ここでは八幡塚古墳を米沢盆地の地域的な中でどの様に位置付けられるかを推測し、まとめたい。まず米沢盆地内に存在する古墳として、確実に4世紀段階に成立したと言えるものは、川西町の天神森古墳、米沢市の竜頭塚古墳、南陽市の稻荷森古墳（若干古すぎる様ではあるが最近の調査で4世紀中頃？と言う）の2前方後方墳と1前方後円墳がある。それらは地域的に米沢・

川西・南陽と区分され、概ね平野部の沖積層（稻荷森古墳を除く）に近い所に立地する特徴を示す。これらの3古墳を仮に成立・発展段階の古墳とすれば、地域集團の中で優位に統轄した首長墓と考えられない訳でもない。それが5世紀初から5世紀前半段階に入ると石製模造品等が多発する様に、山靈信仰的な原始山岳信仰の要素も加わって、靈魂の存在する山の屋根や山頂に、小規模の前方後円墳や前方後方墳群が構築される様になるものと考えてはどうであろうか。川西町は、小森山古墳群他の支群、南陽市は経塚山6号墳、同2号墳等の古墳群に位置付けられ、米沢市は戸塚山139号墳等4基が集中する山頂古墳群の出現となる。この段階を更に2時期に区分し、前者を、概ね5世紀中頃の戸塚山139号墳までを定着段階、それ以降の5世紀後半から6世紀前半頃に小規模な前方後円墳等が多発する段階を分立段階と理解したい。

さて八幡塚古墳であるが、古墳の立地と年代的な吟味からすれば先の寶領塚が成立した成立・発展段階に後続する位置付けが可能である。5世紀の初頭から中葉頃になると一気に平地から山頂にも古墳が造られる様になる。従って八幡塚古墳の成立は戸塚山139号墳成立の直前に当り米沢地区周辺（最上川に鬼面川、和田川が合流する一帯までを含む）の変遷でとらえるならば、寶領塚古墳→八幡塚古墳→戸塚山山頂古墳の順で推移していった可能性が強い。

紙数の関係でこれ以上述べることはできないが第9表として現在の考え方を米沢盆地における古墳変容概念図として付けておいたので、参考にしていただきたい。但し、今後の調査の進行によっては、若干の修正や変更も充分有り得ることを重ねて強調しておく。

第9表 米沢盆地における古擅窓容概念図(1989手探)



## 第5節 大樽遺跡

### I 周辺遺跡の分布状況〔第35図〕

本遺跡は現在の館山四丁目地内にあるが、周辺には第35図に示す様に、東から「生蓮寺遺跡」「大樽遺跡」「館山C遺跡」の順で斜平丘陵北端山麓と大樽川との間の河岸段丘上に存在する。

「生蓮寺遺跡」は縄文の集落跡として捉えられているが、昭和61年8月、住宅新築に係わる発掘調査が実施され、ここから東日本では北限となる美濃焼の陶器片が検出され、これが小樽川流域遺跡群の一つである「戸長里窯跡」のものと同一であることが判明した。「戸長里窯」は利用された期間が極めて短期間であり文献にもない遺跡であるが、ほぼ伊達政宗時代と推定されており、このことは後述する「館山城」との関係上大変興味深いものがある。

次に「館山C遺跡」であるがこれも縄文中・後期の集落跡として登録されており、今回の分布調査ではその南限までは調査できなかったが土器片、石器片などが散布している。

時代は全く異なるが「館山C遺跡」の大樽川を挟んだ対岸の丘陵に今年度から開始された「中世城館址調査」事業によって発見された「城館址」がある。詳細は後述するが明らかに中世城廓の特徴である「縱掘り、曲輪、虎口」等の遺構が見つかり、從来その所在が不明であった「館山城」ではないかと想定されるものである。

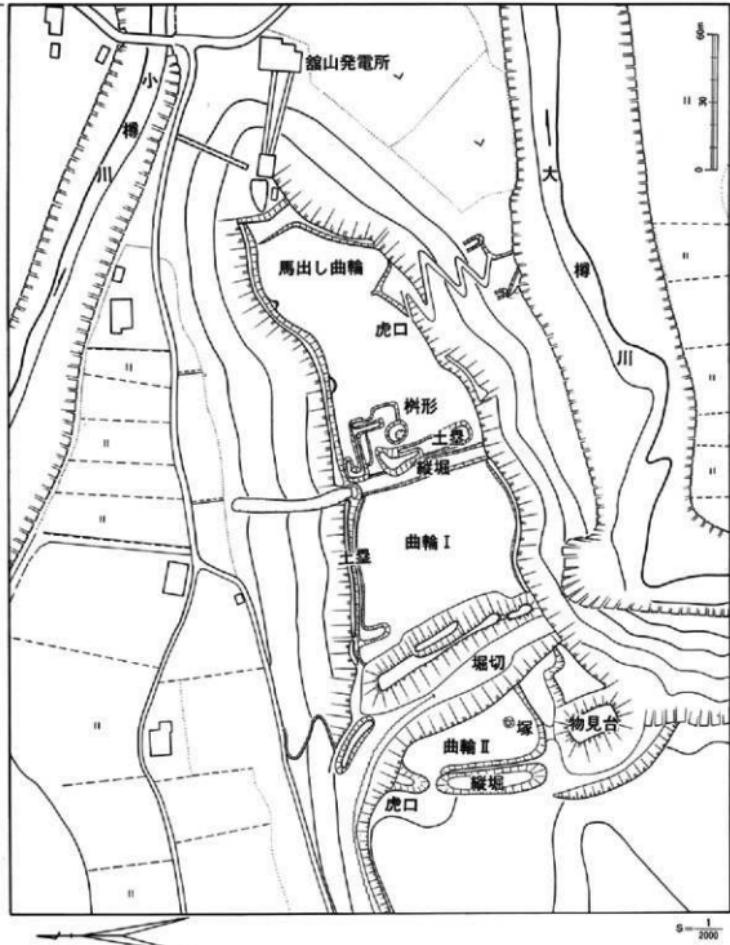
### II 歴史的背景〔第36図〕

館山地区について述べたものは少ないが、中村忠雄編『旧米沢市町名由来』(昭47)によれば「館山の地は、伊達時代に於て第十七代政宗の父輝宗の隠居所があった所で、その以前には伊達氏の家臣新田安房守の小さな館があった。そして天正十五、十六の両年、政宗が米沢城の狹隘を感じ館山に新たに築城を計画して二ヶ年間、築城工事を起し、外廓に並松土手（土塁）と濠（水堀）が出来上ったのであるが、天正十七年（6月）、会津の芦名氏を亡しその居城黒川城に移ったので館山築城が中止され、館山の今の諸町は概ね上杉時代の初期に出来たものである（新田・伊達時代にはごく僅かの町が出来ていたらしい）」とあり、町名として全てに「館山」を冠して三十軒町、十六軒町、片町、本町、上町、花仙町、屋代町、大樽町、中ノ横町、上ノ横町等の町名の由来を紹介している。

この中で、「伊達輝宗の隠居所」、「伊達氏の家臣新田安房守の小さな館があった」そして「天正十五、十六の両年（略）館山に新たに築城を計画」の記事がまず目につく。「隠居所」については、伊達治家記録天正十二年の項に「此月（十月）、公隠居シ給ヒ、政宗君ニ御家督ヲ譲リ玉フ。米沢城辺館山ニ御城ヲ築キ、隠居所トシ給フ。其間、駄賀安房宗重宅に御座ス。天正十三年ニ至テ普請成就ス。即チ館山へ移住シ給フ」とあるが、それがどのような場所、規模であったか等の普請の様子は判らない。次に「新田安房守の館」についてだが、新田氏についてはその祖は田沢

村に「新田館」を構えていたが至徳年間に伊達により亡はされ、後に許され天正年中に再興新田安房守と称す。館山村の館山寺の開基となる。館山における新田の館がどのようなものであったかについては一切不明である。次に「政宗による館山築城」についてであるが、「米沢古誌類纂」(昭49)の中の『米沢事跡考』には「○館山城 上長井立山村なり今は諸士屋敷屋代町(八代とも)伊達大膳大夫政宗長井を掌握して此地に城を築く。西は鬼面川を帶ひ東は街也(四低地)並松を廓中とす。最要害の大城也。西山に又城あり今城山と云千疊敷の大廈を建て備を置くと也」とあり、同じく『米沢地名選』では「館山城(俗名城山)正宗長井を治め此地に城を築く西は鬼面川を帶ひ東は街なり並松を廓中とす尤も要害の地なり西山上に又城あり今城山と云千疊敷の大殿あり侍を置く處なり上長井立山村なり今の諸士屋敷屋代町(八代町共云ふ)陰陽和合の城と云言心は高陽に実城之れあり平地に二之廓を設くるを云是古法の繩張なり」とある。『米沢事跡考』は元文6年(1736)、『米沢地名選』は文化6年(1804)に著されたが、その間約70年の隔たりがあるものはほぼ同じ内容である。ただ『米沢地名選』の方が多少詳しく述べられている。そこで政宗の「館山城」の築城であるが、文献資料としては「伊達治家記録」の中の「性山公」(輝宗)と「貞山公」(政宗)の記録のみである。「性山公」では天正12年の頃に「此月(10月)公隠居シ給ヒ、政宗君ニ御家督ヲ譲り玉フ。(略)米沢城近館山ニ御城ヲ築キ、隠居所トシ給フ。其間、鮎貝安房宗重宅ニ御座ス。天正十三年ニ至リテ普請成就ス。即ち館山へ移住シ給フ」とあるのみである。その隠居所が具体的にどこをいうのか、又その規模はということは不明である。次に政宗の築城についても「天正十五年二月七日丙寅。去月十一日館山地取ノ絵図老臣等ニ御談合有テ、今日御出、地割アリ。日暮御帰」とあるだけで、それが館山城繩張りのことをさすのか何とも言えない。

ここに本年度より始った「中世城館址調査」により第36回のような城館址が発見された。ここは大椿川と小椿川に挟まれそれが合流する長峰山丘陵北端に位置し、標高は308mを計る。館山6丁目で標高175mであるから約33mの比高差があることになる。ここに南北110m東西50mの「馬出し曲輪」と南北60m東西70mの「曲輪Ⅰ」があり、他に「虎口、櫛形、縦堀、堀切、物見台」と思われる遺構が存在する。このことは前述の「西山上に又城あり今城山と云千疊敷の大殿あり侍を置く處なり」の記事に符合するのではないだろうか。事実この場所に立つ時、米沢市中は無論のこと田沢・三沢・上長井・南原方面が一望でき、もし敵襲があった場合いち早くそれを知り得る格好の地であり、正に「要害の地」といえる。そして「千疊敷」とは、この「馬出し曲輪」もしくは「曲輪Ⅰ」の何れかのことではないか。政宗が築城(或は中止)した館山の記事は上述の館山城のことを中心とした今日の館山5丁目(旧館山本町)辺りのことをさし、かつての新田安房守の館を核として繩張りをしたのではないかと想定される。『町名由来』の、「新田・伊達時代にはごく僅かの町が出来ていたらしい」の記事が気になるところである。



第36図 館山城縄張図(作図:手塚、菊地、金子)

〈註〉 本縄張図は、文化庁の補助を受けて県で実施している「中世城館址調査」の資料を県の了解を得て携載した。

### III 試掘調査の概要

米沢市の西方に位置する大椿遺跡周辺は畑や果樹園が多い地域であったが、最近は宅地として利用されるケースが増加する傾向が見られる。この様な状況の中で遺跡の範囲及び性格を明確にする目的で第35図に示した様な範囲内で試掘調査を実施した。

調査は表土の遺物採集、ボーリング探査を併用し、地元の人たちからの聞き取りとともに不明な箇所については、A～Vの22箇所の試掘を行って、(図の黒丸地点)進めた。畑の場合は作物があるため限定された場所となった。水田地帯は稲刈りが終了した後に1日間実施している。その結果、図の破線で示す範囲から遺物と遺構の存在を示す土色変化が検出された。遺物は土器と石器、陶磁器に大別され、年代的には縄文、中世、近代の各時期に併行するものであった。縄文時代は縄文前期初頭(関東の間山式平行)、同中期中葉、後葉(大木8b、大木9a、大木9b式)、同後期初頭、中葉(関東の堀之内I・II式、東北南部の南境式、関東の加曾利B I・II式、東北南部の宝ヶ峯式)に細別される。中世は戸長里窯焼、瀬戸、美濃系の陶磁器、近世は地元の成島焼、福島の大堀相馬焼などであった。遺物の量としては縄文時代が最も多く、次いで近世、中世の順である。

IIの歴史的背景で述べたように、本遺跡群が位置する地域は『館山』であり、今回調査区を設定した西側に南北12m、幅3m、高さ2m規模の土塁が残存している。さらに川を隔て、舌状台地及び周辺は『館山城跡』との言い伝えが残っている。ゆえに本遺跡群と密接な関連性を重視し、縄張図を作成、第36図に示した。縄張図作成には5日間を要した。土塁は前述した地点以外には今回の調査では確認出来なかったが、地元の人の話によれば北へ延びていたと言う。

地点別には1985年に調査した生蓮寺遺跡周辺は主に縄文前期初頭を中心とした遺物と、若干後期土器片が認められた。試掘坑のT・S地点からは炭化物や溝状遺構が検出され、南側に遺跡の中心が想定される。Q・R地点は泥炭層が主体をなし、大型の溝状遺構の存在が指摘される。I地点は削平され住宅地としての利用が多く、遺物も存在しない。L・Hの中間は小規模な谷間になっており、中期、後期の土器片が検出され、N・P地点は湿地帯で遺物は認められない。

K・G・E地点は主に後期の土器片が多く認められた。この地点は擾乱されている。B・D・Cは中期・後期が同量ぐらいの割合で認められる地点であり、J・O周辺は中期が主体をなすものと考えられる。

前述したのは縄文時代の試掘結果であり、次の様な事が言えよう。まず生蓮寺遺跡は縄文前期初頭が中心、大椿遺跡は縄文中期中葉から後期中葉、南側に延びる館山C遺跡は縄文中期の中心年代が与えられるものと推定したい。

中世については土塁、館山城、中世陶磁器が今回の試掘調査で確認された事も大きな成果の一つに上げられよう。以上の事から、本遺跡群は縄文・中世の大複合遺跡群である事が判明した。

#### IV 調査の経過

試掘調査を実施した地点は第35図に示した箇所であり、大櫛遺跡の西南端部に位置す。試掘地点の選出については、次の事項による。①農作物が栽培されていない場所。②果樹の木の周囲3m以上離れた場所。③擗った土砂の捨場があること。これらの諸条件を満たすのが、偶然にも土塁が存在する東側の地点であった。我々はこの地点の地主から了解を受け、昭和63年（1988）の8月3日より試掘調査を開始した。

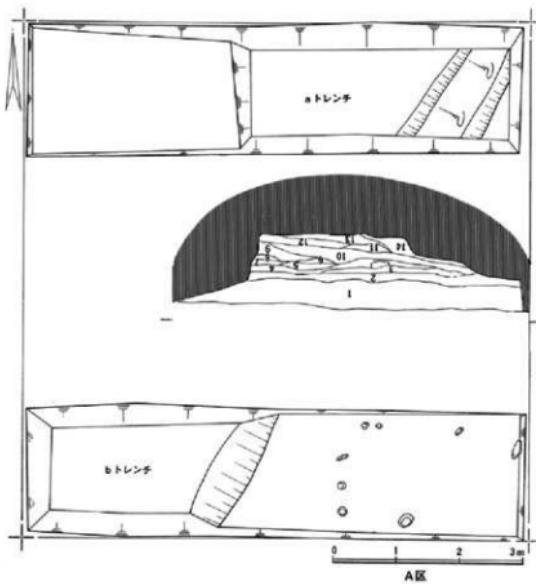
最初に真北方向を基準として8m×8mの範囲をA区、更にA区南東基点より南へ13mの地点に6m×6mの範囲をB区と設定した。8月3日と4日はA区の表土剥離を実施した。表土（I層）は第37図で示す様に擾乱層であった。表土剥離を終了した時点での南北に走る溝状遺構のプランを確認した。この遺構の性格を明確にするためにA区南北に幅2mのトレンチを配した。8月5日は雨のため現場作業は中止とし遺物洗浄を行う。6日も打合せのため現場は休みとした。

8月8日からB区の調査を開始した。その結果B区は地山まで後世による擾乱層であることが判明し、そのためB区は調査区の半分だけ精査した。8月9・10日の両日でB区を終了する。

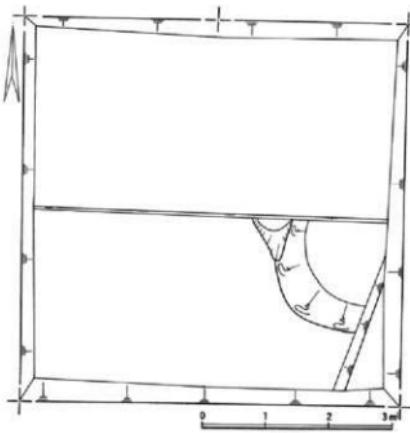
8月11日も雨で作業中止を余儀なくされた。12日にA区溝状遺構（南側のbトレンチ）の掘り下げを開始し、1日で終了した。8月13日～8月21日の期間は休みとした。8月22・23日の2日間でA区aトレンチ（北側）の掘り下げを終了する。この結果、溝状遺構は自然遺構であることから調査区全体の掘り下げは行わず、a・b両トレンチの精査にとどめた。8月24日にセクション図及び実測図、写真撮影を実施、その後埋め戻し作業を行い、今回の試掘調査を終了した。

#### V 検出された遺構 [第37図]

A・B両区共に擾乱された状況であった。しかしながら遺物の出土から察して堅穴住居跡等の遺構が存在する地域であったことは十分に考えられる。今回検出された溝状遺構は偶然にも土塁辺に沿って縱走する状態であることから、当初我々は土塁に関連する空堀ではないかとの意見もあった。結果的には縄文時代に機能していた溝状遺構であった。溝状内埋設土は自然堆積状況であり、14枚に分けられる。（第13表参照）各層位からは縄文土器片が検出されており、その出土状況から次の事項が理解される。①溝は旧河川跡であること。②溝が機能を失ったのは縄文中期中葉から同後期中葉の時期であること。③旧河川は南から北へ流れていたこと。②、③については地形的な面から考えて現在遺跡西側を北流する大櫛川もしくはその支流であったと推定したい。大櫛川は米沢盆地の南方に位置す吾妻連峰を源とし、松川と並んで最上川の源流とされている水量の豊かな河川である。②についてもっと詳しく述べると、河川としての機能を停止した後除々に縁辺から埋没が始まった様子がセクションから観察される。これは縄文中期の遺跡の下に同後期の遺物が埋没している事実であり、縁辺からすべり込むようにして土砂が流れ込んだために起こる現象と理解したい。本遺跡周辺は土質から判断して、この河川が埋没後も大櫛川上流の



A区



B区

第37図 大槻遺跡遺構平面図

いずれかの地点から流水があったことが窺える。溝底面には人頭大の礫が多数認められた。

B地区の遺構としては、自然の落ち込みが確認されたにすぎない。遺物もA地点より出土量が少なく、縄文土器と近世陶磁器が混在して出土するなど地山まで攪乱されている状況であった。

ゆえに、土砂を採集後埋め戻した場所であろうか。土砂を採集した時期は明らかではないが、西側に位置する土壘を構築する際に土砂を移動したとも考えられる。

#### VI 検出された遺物 〔第38図～50図〕※挿図番号と図版番号は同一番号である。

大槻遺跡からは総数1,436点が検出された。主にA、B両区の調査地内出土を中心として、各試掘坑内検出遺物を含めた総数量である。遺物は、土器類、石器類、陶磁器類に大別される。大半を占める土器類は時期的に縄文前期初頭、同中期中葉、後葉、同後期初頭、中葉の5時期に区分される。陶磁器類は近世に位置するものが殆んどであるが、少量中世陶磁器も認められた。

出土地点別に数量を列挙すれば、A区溝状遺構内534点、A区トレンチⅠ層（攪乱層）323点でA区が最も多く、次いでB区112点、各試掘坑、表採120点であった。

##### （1）出土土器 〔第38図、39図〕

本遺跡から検出された土器群の総数は1,080点を数え、その内訳は縄文前期3点、同中期202点、同後期190点、不明613点であった。これらの土器片はいずれも小破片で、磨滅が著しい土器片である。この様な状況から、拓本が可能な土器片はわずか53点にすぎない。従って土器の分類に関しては文様表出技法と単位文を中心に分類しづらを得なかった。年代的な点も考慮すれば次のV群に分けられる。Ⅰ群土器（縄文前期初頭）、Ⅱ群土器（縄文中期中葉）、Ⅲ群土器（縄文中期後葉）、Ⅳ群土器（縄文後期初頭）、Ⅴ群土器（縄文後期中葉）に分けて説明を加えたい。

##### Ⅰ群土器 〔第38図1〕

A区の攪乱層より3点認められ、いずれも破片である。色調は黄白褐色で胎土に植物性の纖維と石英砂を多量に含む。器形は口縁部が緩やかに外反する深鉢形と考えられ、胴部破片と思われる。太状の筋を用いた羽状縄文を構成することから縄文前期初頭に属すると見られ、関東地方の関山式併行、当地では松原遺跡が上げられる。縄文原体は二段の前々段多条である。何本の原体かは磨滅のため不明と言わざるを得ない。

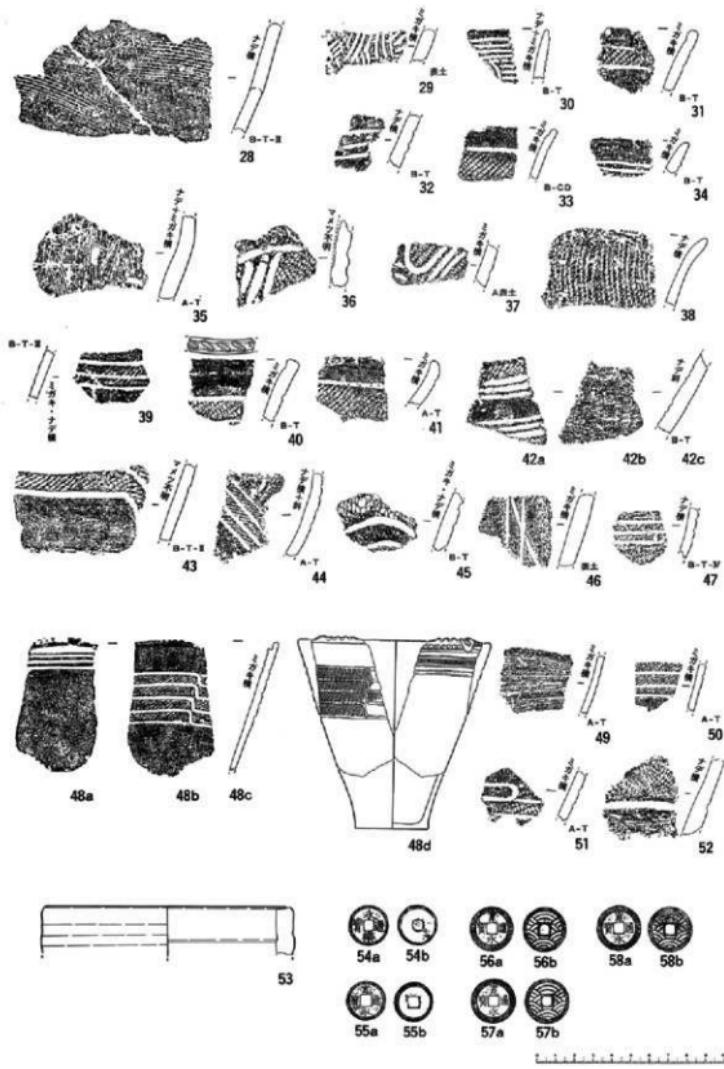
##### Ⅱ群土器 〔第38図2～9〕

器形はキャリバー形の深鉢形と考えられ大きく波状を呈するのが特徴であり、口縁部が外反する2と内反する7が認められる。文様表出技法は調整粘土貼付文と調整沈線文を併用したグループである。他に棒状工具による調整沈線文を横位に施すものと考えられる3がある。

文様表出技法から、本類は大木8b式併行の新しいグループもしくは大木9a式の古式に位置する土器群である。今回の調査では、A区溝状遺構内出土土器の中に多く認められた。文様内の縄文は磨消縄文が主体をなす。



第38図 大埠遺跡出土土器拓影図(1)



第39図 大樽遺跡出土土器拓影、土器、陶磁器実測、古錢拓影図(2)

### III群土器　〔第38図10～27〕

棒状工具による沈線文、ヘラ状工具による細沈線文を施す土器群で、前者は38図の13, 14, 16～18, 20, 22, 25, 27、後者は10, 11, 15, 19に認められる。20は小形土器の胴部破片である。

10, 11は口縁部片で波状を呈し、器形は浅鉢形と推定される。口縁部上端は無文帶で外反する器形を有す。両者とも斜状に細沈線文が施され、10は深く11は浅い。25は縦位の横円文が転回する文様構成と考えられる。他に21の隆帯文、12の様に隆帯文と棒状工具による突刺文の組合せた文様構成がある。13は帯状の無文帶を横位に転回させる文様構成であろう。

磨消繩文は13, 21, 25、充填繩文は14, 16, 17, 22, 23, 26がある。II、III群土器の地文となる繩文原体は4, 5本の前々段多条の繩、L・R<sup>1/2</sup>、同じく直前段多条の繩の2段繩、L・R<sup>1/2</sup>を施す。本群土器群は太木9b式に併行する土器群といえよう。

### IV群A類土器　〔第39図28～34〕

文様手法は棒状工具等を用いて描いた沈線文が主体をなす。土器片は比較的薄く、焼成も良好である。色調は29を除き赤褐色を有し、29は暗青灰色をしている。出土はA区トレンチI層、溝状内II～IV層内が最も多い。文様は併行沈線、渦巻状文が認められた。28は撲糸文を横位に施した、粗製土器片と想定される。他は所謂、精製土器片と考えられる。これらは、関東地方の堀之内I式、東北南部の南境式に併行するものである。当地では上竹井遺跡が代表として上げられよう。器形は口縁部が外反する（第39図48）の様な小形の土器と推定したい。30～34。

### IV群B類土器　〔第39図35～47〕

文様手法はA類と同様であるが、文様構成で相異が認められる。39, 44, 47は無文帶、沈線、そして繩文が横走する。42は土器内面に横走する3条の沈線が認められる。36, 45は棒状工具による突刺文をメルクマールとしている。38は粗製土器の口縁部片で撲糸文を縱表している。

本類土器群は関東の堀之内II式、東北南部の南境式に併行するものである。43は横長に「C」字状の沈線で区画する文様であり、南境式に多く見られるタイプである。

### V群土器　〔第39図48～52〕

今回の出土土器の中で唯一複元実測図を作成した48は、器形が底部から口縁部まで外反しながら内曲気味に直立する小形土器である。口縁部の表面は無文帶、上端部に「の」字状貼付文、小波状文、斜位のキザミ文、内面上端部に尖状工具による突刺文、3条の調整沈線文、沈線の間に上端部と同様な斜位のキザミを施す念の入れ様である。色調は茶褐色、薄く、焼成は良好で胎土も吟味した土を使用している。内面には黒色のススが付着している。

文様は横位の平行沈線文を配し、数単位（3）の空間に縦位の区画を加えることによって「ランク」状を示し、その間に3本前々段多条の繩文を充填することによって、より一層の文様表出の効果を上げている。50も同様に考えたい。49はヘラ状工具による横位の細沈線で、色調は

黒色を呈す。これらの土器群は関東の加曾利B 2に近いタイプであり、東北南部の宝ヶ峯に併行するものである。

その他の遺物　〔第39図53～58〕　〔第11図版〕

中世陶磁器 3点、近世陶磁器48点、古銭 5点がある。中世陶磁器は第39図53の戸長里窯匣鉢1点と瀬戸、美濃系の（17世紀）菊皿、茶碗、各1点が出土している。（第11図版）戸長里窯の遺物は、大椿遺跡の東方約300mに位置する生蓮寺遺跡からも出土しており、館山城と深い関連性を有す資料として注目される。

近世陶磁器は、調査範囲の中にあったゴミ捨て場からの出土で占められる。與須の色調からして、明治以降の陶磁器類が主体をなす。若干、肥前系の染付皿（18世紀）が混入していた。

古銭は「永楽通寶」1枚〔第39図54〕、「寛永通寶」4枚〔第39図55～58〕がある。前者の古銭は中国の明時代、成祖永樂帝の時代に造幣されたもので、「洪武通寶」、「宣德通寶」などと並んで室町時代の日明貿易で多量に日本に輸入された古銭である。この「永楽通寶」は、徳川幕府により慶長11年（1606）に流通停止令が出ているが、永年使用されて来た事からなかなか徹底せず、改めて慶長13年（1608）に再度、厳しく流通停止令が出されている。これらの諸事項から考えて「永楽通寶」は室町～江戸時代初期に位置づけられよう。後者は江戸時代から流通した通貨で明治の初期まで使用されていた。

（2）石器　〔第40図～50図・第10, 11, 12, 14表〕

本遺跡からは石器27点、剝片236点、礫7点が出土している。石器、礫については実測図、計測表、形態分類表、剝片については剥片の形態分類表をそれぞれ作成した。石器の形態分類、剝片形態分類、礫の形態分類に関しては米沢市教育委員会刊行の埋蔵文化財報告書第6集33頁、第7集23頁～36頁に示した分類基準に沿っている。

石器、剝片、礫は大椿遺跡周辺で最も多く表採できる遺物で畠のわきに積んである礫群の中に認めることができた。以下、石器、剝片、礫の順で説明したい。

石器　〔第40図～48図〕

I群石器（石鎌）、II群石器（尖頭器）、III群石器（石錐）、IV群石器（石匙）、V群石器（打製石斧）、VI群石器（石鎧状石器）、VII群石器（削器、搔器）、VIII群石器（石核）の8形態が出土している。

I群石器　〔第40図61〕

尖端部が欠損している形態で1点出土している。両面に1次剥離面を有し、縁辺からの両面調整によって整形されている。全体の形状から観察して製作途上の失敗品と推定したい。

II群石器　〔第40図59, 60, 62, 63〕

4点出土している。65を除き両面調整により、整形され、基部が丸味を帯びる62と平坦な60そ

してやや尖状を呈す65の3形態が認められる。62, 65は1次剥離を残し65は未完成品であると考えられる。63はI群石器の未完成品で断面も厚く形状も不定形である。

III群石器〔第40図64, 第41図66, 67〕

いずれもつまみ部の整形が明瞭でない石錐のグループで3点出土されている。64は尖端部が欠損している。64, 66は錐部中央の稜線を利用して錐部の断面は3角形を呈す。67は意図的に整形した切断面を利用して錐部を整形しているタイプである。石錐を製作するためのひとつのか法と考えられる。3点とも片面調整を主体としている。

IV群石器〔第42図72〕

縦形で中央に稜線を有す薄形の剥片を素材に用い片面調整によりくびれ部を整形した石匙である。縁辺からの剥離調整は剥片素材の原形をとどめる簡単な調整で仕上げられ作業縁辺のb面には(スクリントーンの部分)磨滅痕が観察された。縄文中期に多く見られる石匙である。

V群石器〔第43図74, 第44図77, 第45図78, 第47図83〕

4点、4形態が出土している。74は刃部の形態から理解して刃部再生が加えられた打製石斧である。刃部再生が困難になった時点で廃棄されたものと考えたい。77, 78, 83は縄文中期末葉から同後期初頭に位置づけられる打製石斧の形態である。V群b<sup>1</sup>類の刃部が幅広くなった形態にj<sup>3</sup>類は類似する。77, 83は石材が粘板岩で他の石器の石材である頁岩と比較すれば軟質である。

VI群石器〔第41図69, 70, 第42図73, 第43図75, 76, 第45図79, 第46図80, 第48図86〕

最とも出土数が多い形態であり、10点出土している。70は横形で薄形の剥片を素材に用い刃部は鋭利に整形されている。柄を着装して使用した石器と考えられ刃部に使用が認められた。

VII群石器〔第46図81, 82, 第47図84〕

81, 82はいずれも削器で片面調整である。縁辺に使用痕が認められる。84は使用痕なし。

XI群石器〔第48図85〕

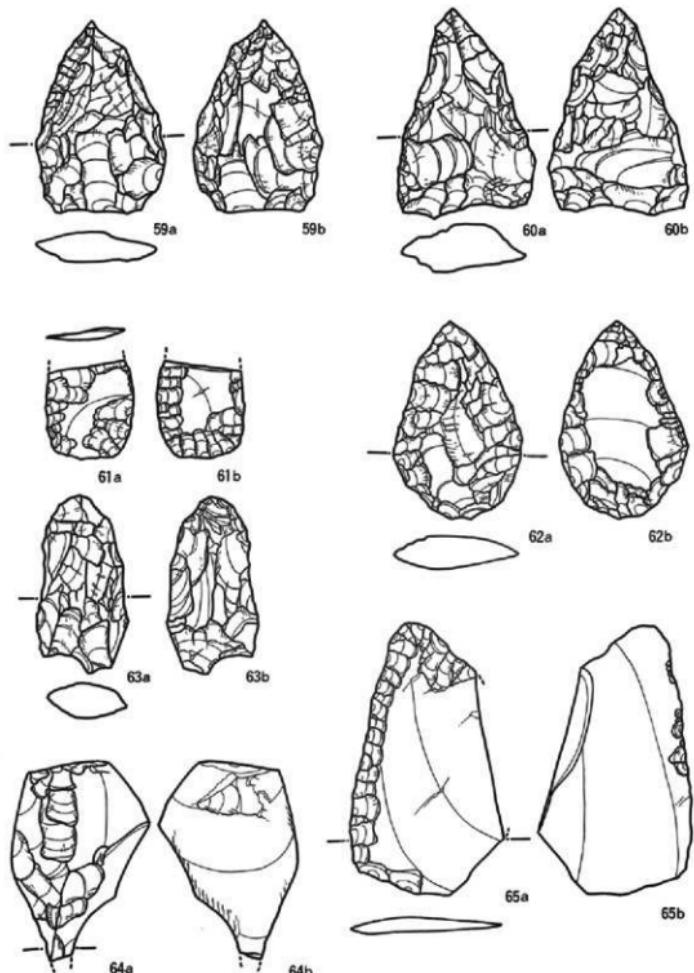
実測図を作成した以外にも4点出土している。いずれも自然面や節理面を有し小形である。

礫〔第49・50図〕

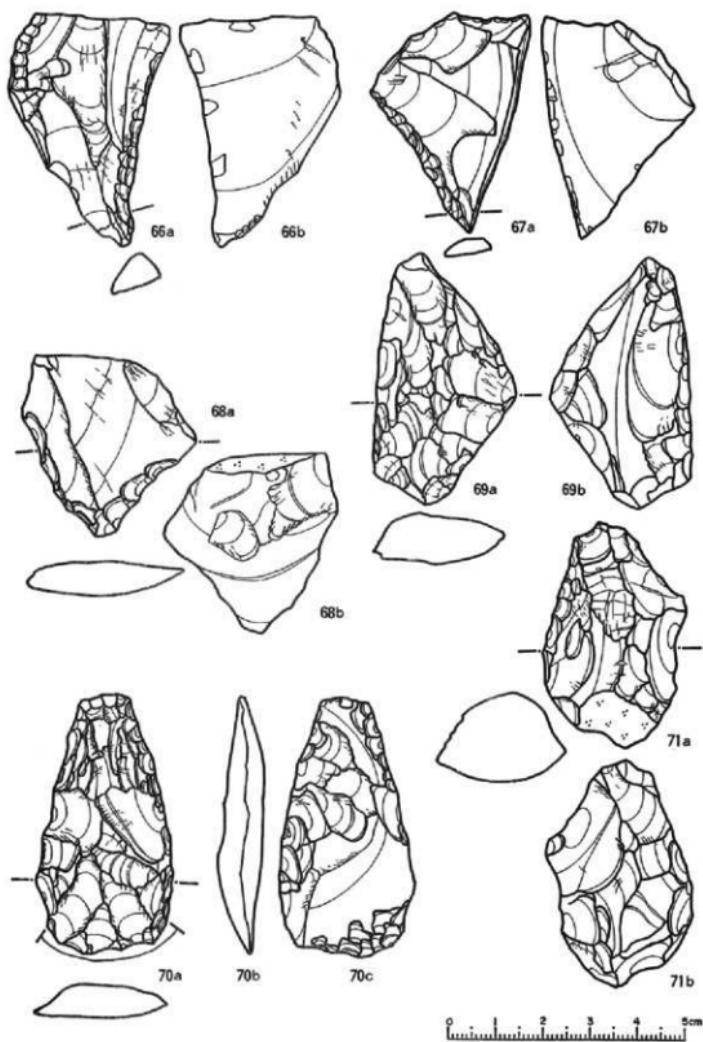
凹石、磨石、石皿が出土している。層位的な把握が困難であったためこれらの礫器が先述した縄文時代のどの時期に位置するかは明確に出来なかった。

凹石〔第49図87~90, 第50図91, 93〕

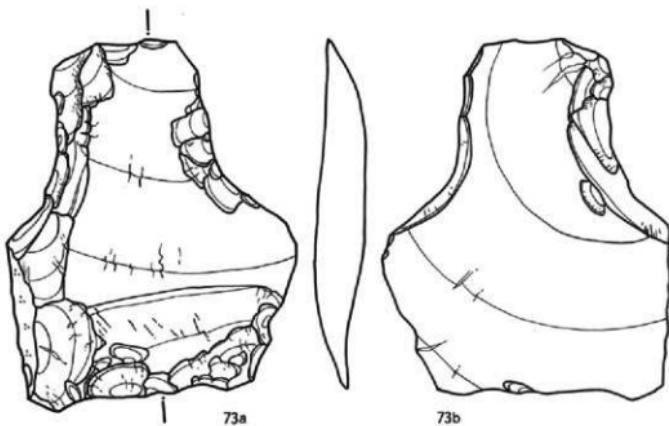
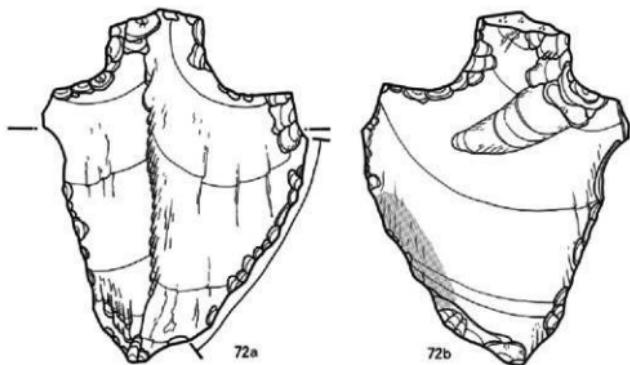
6点検出され、形態から2者に細別される。87, 88, 90は素材となる河原石にはほぼ中央に円形状を凹部を呈すもので、従来の凹石とは穴の形態、大きさで相異なる形態を有す。この様な凹部を有す礫器は本来棒状の礫とセットになっているものと理解され、本市の八幡塚遺跡からの出土例がある。石皿〔第50図92〕は1部欠損した形態を有す。内面に幅約1cmの凹線が縦位に4本認められ、外形状は舟形を呈すものと考えられる。



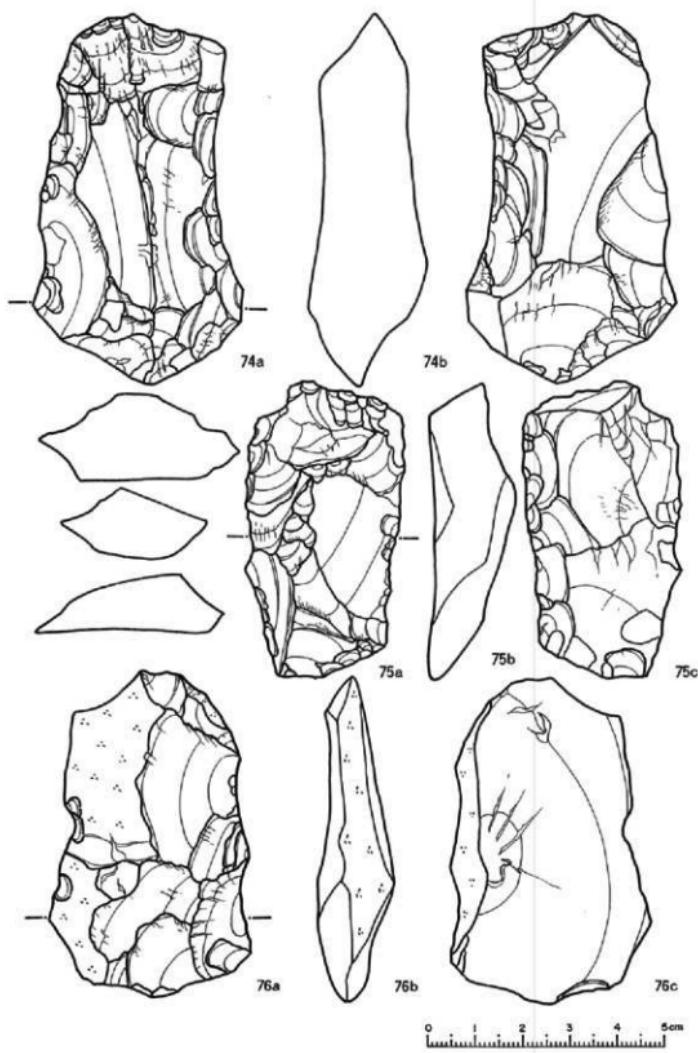
第40図 大搏遺跡出土石器実測図(1)



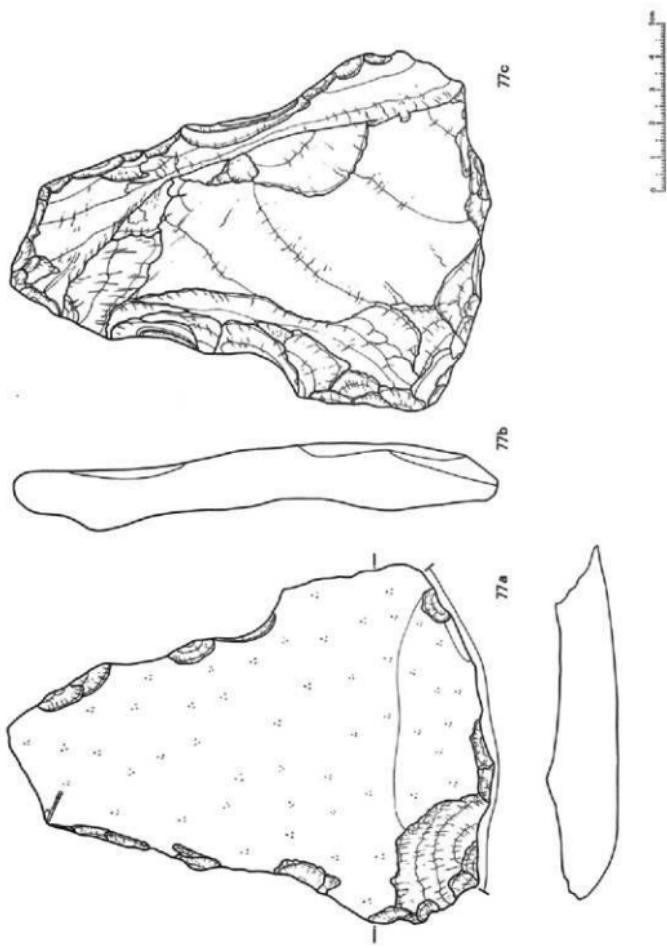
第41図 大樽遺跡出土石器実測図2)



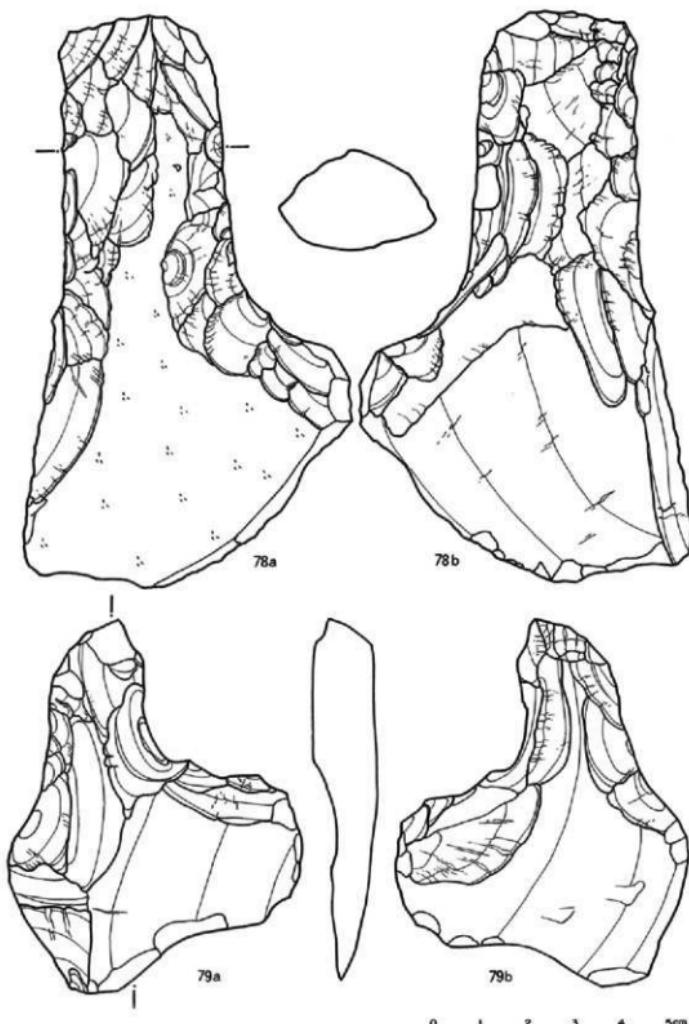
第42図 大樽遺跡出土石器実測図(3)



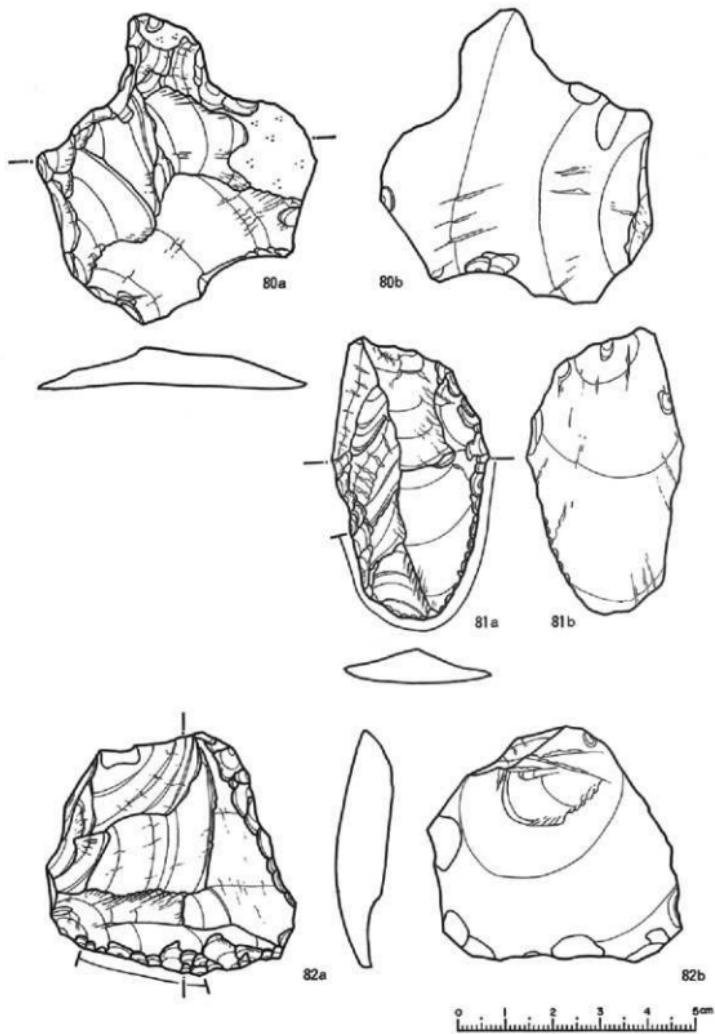
第43図 大楊遺跡出土石器実測図4)



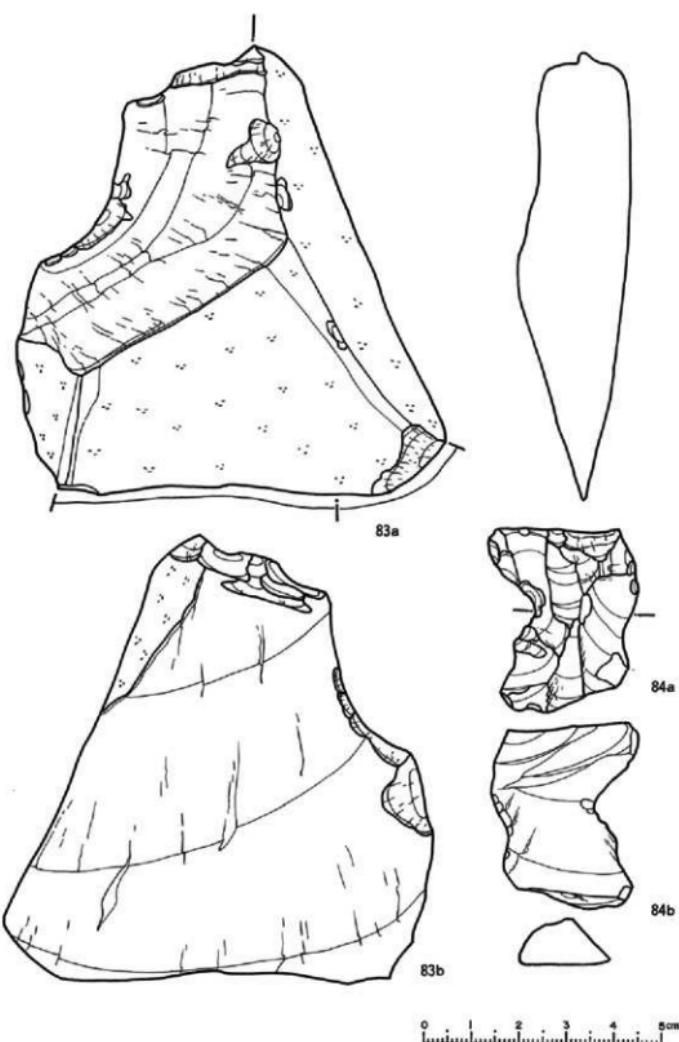
第44図 大樽遺跡出土石器実測図(5)



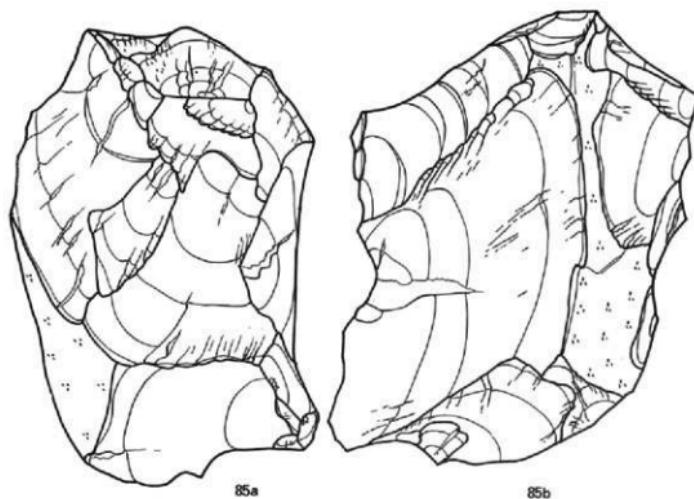
第45図 大得遺跡出土石器実測図(6)



第46図 大樽遺跡出土石器実測図7

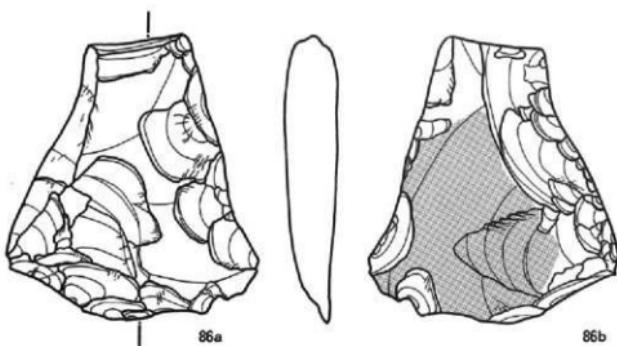


第47図 大樹遺跡出土石器実測図8)



85a

85b

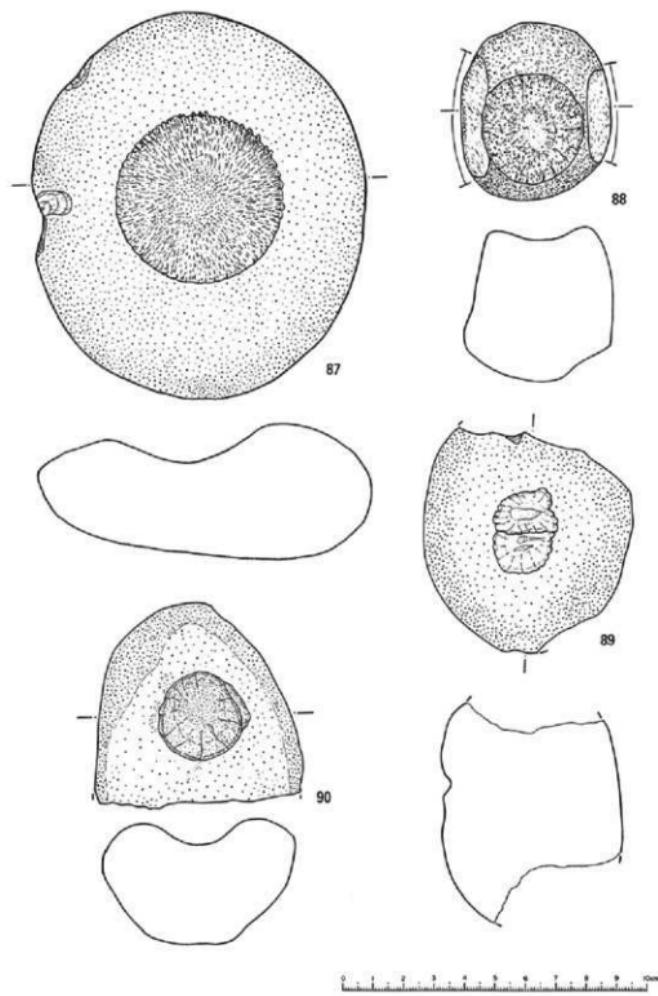


86a

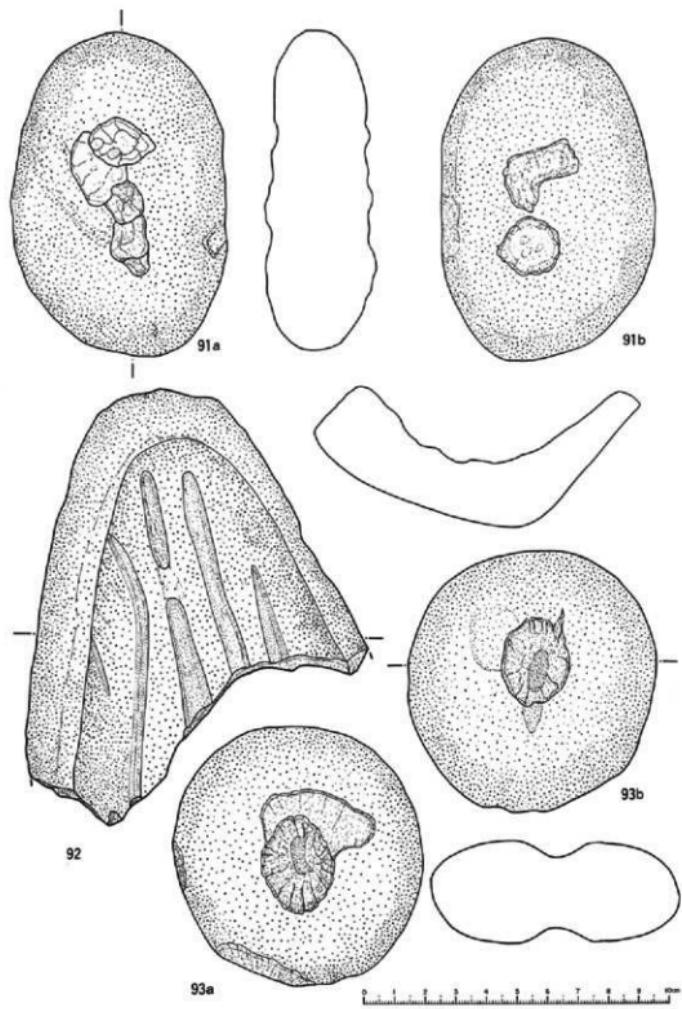
86b



第48図 大樽遺跡出土石器実測図(9) ※ 86は八幡塚表探



第49図 大樽遺跡出土石実測図(1)



第50図 大槻遺跡出土標実測図(2)

第10表 大槻遺跡出土石器形態分類表 [I群石器a'類, II群石器a', c', e'類, III群石器a', c', c'類] (長さ、幅、厚さ)  
(cm、mm)

|                    |         | 形 態 | 特 微  | 計測平均                                 | 揮回番号                       | 層位                      | 住居跡 |
|--------------------|---------|-----|--|--------------------------------------|----------------------------|-------------------------|-----|
| I<br>群<br>石<br>器   | a'<br>類 |     | 二等辺三角形を呈す石器を本類とした。本遺跡の石器は尖端部が欠損している。                                       | 長さ (2.1)<br>幅 1.9<br>厚さ 0.3<br>重さ 1  | 第40回61                     | 溝Ⅲ f<br>1点              |     |
| II<br>群<br>石<br>器  | a'<br>類 |     | 両面調整により整形され、基部が丸味を呈す形状である。I群石器よりも大形で肉厚のものが多く認められる。剥離はI群に類似する。              | 長さ 4.1<br>幅 2.7<br>厚さ 0.8<br>重さ 6    | 第40回62                     | 溝 f<br>1点               |     |
| III<br>群<br>石<br>器 | c'<br>類 |     | 基部が平坦に整形された尖頭器で大形(5cm以上)をc'類、小形(5cm以下)をc'類とする。                             | 長さ 4.1<br>幅 2.7<br>厚さ 0.8<br>重さ 5    | 第40回59<br>第40回63<br>第40回65 | I層<br>1点                |     |
| III<br>群<br>石<br>器 | e'<br>類 |     | 不定形を有するグループであり、I, II群石器の未完成品と理解される。未完成品は製作過程において、剥離調整の失敗や素材の性質から生じるものであろう。 | 長さ 4.3<br>幅 2.4<br>厚さ 1<br>重さ 5.5    | 第40回60                     | Ⅲ層<br>1点<br>溝10 f<br>1点 |     |
| III<br>群<br>石<br>器 | a'<br>類 |     | 細身の剥片を素材とし、各辺から調整を加え整形している。うまみ部の整形は明確ではない。                                 | 長さ 4.7<br>幅 3.1<br>厚さ 1.1<br>重さ 13.5 | 第40回64<br>第41回66           | 表土<br>1点<br>I層<br>1点    |     |
| III<br>群<br>石<br>器 | c'<br>類 |     | 本類は大形の剥片を素材に、切断面を利用して端部を整形するのが最大の特徴である。                                    | 長さ 4.7<br>幅 3.7<br>厚さ 0.8<br>重さ 8    | 第41回67                     | 溝5 f<br>1点              |     |
| III<br>群<br>石<br>器 | c'<br>類 |     | 剥離調整が尖状部に集中し、整形されたグループを本類とする。  | 長さ 3.9<br>幅 3.9<br>厚さ 1<br>重さ 10     | 第41回68                     | 溝Ⅱ層<br>1点               |     |

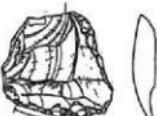
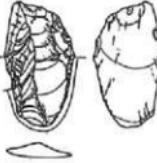
〔IV群石器d類, V群石器b類, j'-j類〕

|                  |     | 形態 | 特徴  | 計測平均  | 掲図番号   | 層位       | 住居跡 |
|------------------|-----|----|---|---|--------|----------|-----|
| N<br>群<br>石<br>器 | d類  |    | 縫形石鉋をIV群d類とした。剥離調整は素材の形状をとどめるような簡単なものである。つまみ部は両面調整により整形されている。                                 | 長さ 7.0<br>幅 5.7<br>厚さ 1.0<br>重さ 2.2           | 第42図72 | 溝f<br>1点 |     |
| V                | b'類 |    | 基部がやや尖状を有す打製石斧を本類とした。本遺跡出土の石器は刃部形態の観察から判断して刃部再生が加えられたものであり、製作当初より小形である。                       | 長さ 7.9<br>幅 4.5<br>厚さ 2.2<br>重さ 78            | 第43図74 | 表土<br>1点 |     |
| 群                | j'類 |    | 撮影を星す打製石斧をj'類とし、さらに剥離調整や刃部及び基礎の形態等からj'類-j'類に細別を加えた。j'類はj類の基本形とした。                             | 長さ 14.6<br>幅 10.9<br>厚さ 2.1<br>重さ 320         | 第44図77 | 表土<br>1点 |     |
| 石                | j'類 |    | 基部から刃部に至る縁辺の片方だけに調整を加えた打製石斧であり、自然面と一次剥離面から成る刃部は銳利な形態を有す。j', j'類とも粘板岩を素材として使用している。素材はあまり硬質でない。 | 長さ 9.7<br>幅 8.7<br>厚さ 2.7<br>重さ 110<br>刃角 25度 | 第47図83 | 表土<br>1点 |     |
| 器                | j'類 |    | 刃部と基部が区別できる石器を本類とする。基部は両面調整により整形され断面形態は指円形状を呈す。刃部は半月形を有し自然面、一次剥離面から成る。                        | 長さ 11.9<br>幅 6.6<br>厚さ 2.5<br>重さ 170          | 第45図78 | 表土<br>1点 |     |

[VI群石器b類～f類]

|        |    | 形 無 | 特 徴  | 計測平均   | 挿図番号             | 層位                           | 住居跡 |
|--------|----|-----|--|--|------------------|------------------------------|-----|
| b<br>類 | b類 |     | 石剣状石器をVI群とする。b類は基部が尖状を有し両面調整により整形された石器群である。                                | 長さ 5.0<br>幅 3.2<br>厚さ 6.5<br>重さ 18.5         | 第41図69           | I層<br>1点                     |     |
|        | f類 |     | 前面が薄く比較的小形な石器を本類とした。さらに形状が二等辺三角形状を呈すf類。長方形状はb類とする。刃部は鋭利であり、片刃の「クサビ」を連想させる。 | 長さ 5.5<br>幅 3.0<br>厚さ 0.8<br>重さ 13<br>刃角 35度 | 第41図70<br>第41図71 | 表土<br>1点<br>溝<br>1点          |     |
| e<br>類 | e類 |     | 本類は剝離調整が簡単な冒群石器であることから、経刃に自然面や切断面が認められる。本遺跡出土の本類石器は横形の剥片を素材とし片面調整である。      | 長さ 6.9<br>幅 4.2<br>厚さ 1.6<br>重さ 33           | 第43図76           | 表土<br>1点                     |     |
| 石<br>器 | j類 |     | 基部が平坦な石器を本類とした。V群e類石器を小形にした形狀である。<br>内面調整により長方形状に整形され刃部は薄形を呈す。中央部が最も厚い。    | 長さ 6.2<br>幅 3.1<br>厚さ 1.8<br>重さ 33           | 第43図75           | 表土<br>1点                     |     |
| i<br>類 | i類 |     | 本類はV群石器j類～i類の小形の石器群に類似する。i類は片面調整により整形されている。                                | 長さ 2.8<br>幅 6.1<br>厚さ 1.5<br>重さ 54<br>刃角 20度 | 第42図73<br>第48図86 | IV層<br>1点<br>八幡原<br>より<br>1点 |     |
| i<br>類 | f類 |     | f類は基部が両面調整により整形された石器でV群j類に類似する。  | 長さ 6.1<br>幅 5.5<br>厚さ 1.1<br>重さ 39.5         | 第45図79<br>第46図80 | 表土<br>2点                     |     |

〔霞群石器g<sup>1</sup>類・m<sup>1</sup>類・x<sup>1</sup>類・m<sup>2</sup>類〕

|                               | 形<br>態  | 特<br>徴  | 計測平均   | 掲<br>番<br>号                          | 層<br>位   | 住<br>居<br>跡 |
|-------------------------------|---|---|--|--------------------------------------|----------|-------------|
| 霞<br>群                        | g <sup>1</sup><br>類   | <br>    | 霞群石器はスクレーバー類を一括したものであり、素材となる剥片の形状を利か用した剝離調整が加えられているものが多い。すなわち持ちやすくて、切れやすく削りやすくなる。小形の方形状を有するサイド・スクレーバーを本類とする。               | 長さ 5.1<br>幅 5.0<br>厚さ 1.2<br>重さ 33   | 第46図82   | 表土<br>1点    |
| 石<br>器                        | j <sup>1</sup><br>類   |    | 使用線刃が丸味を帯びた形で整形された石器を本類とした。剝離は刃溝しの調整が多く認められる傾向を有す。紙長の剥片を素材に用いバブル除去を加えている。  | 長さ 6.0<br>幅 3.3<br>厚さ 1.0<br>重さ 9    | 第46図81   | 表土<br>1点    |
| m <sup>1</sup><br>類           |  | 抉りを有する石器類を本類とする。m <sup>1</sup> 類は両端部に抉りを持つタイプである。本類は線刃に抉りを有する事からm <sup>1</sup> 類と区別し m <sup>1</sup> 類とした。   | 長さ 3.8<br>幅 3.0<br>厚さ 1.0<br>重さ 9  | 第47図84                               | 表土<br>1点 |             |
| x <sup>1</sup><br>群<br>石<br>器 | a <sup>1</sup><br>類   | <br> | 石核を刈削とした。本遺跡出土の石核はいずれも自然面を有す。ゆえに、簡単に片手でもてる位の石核であった事が理解される。剥片を得る剝離作業は各段階から加えられている石核群である。また節理面を有する石核はその時点での剝離作業を断念している痕跡を有す。 | 長さ 10.4<br>幅 7.0<br>厚さ 5.4<br>重さ 180 | 第48図85   | 表土<br>4点    |

第11表 大樽遺跡出土石器計測表 (長さ・幅・厚さ(cm)・重さ(g))

## I群石器

| 通しNo | 遺物No | 挿図番号   | 出土地区  | 層位  | 長さ    | 幅   | 厚さ  | 重さ | 石材 | 形態   | 剥離                       | 調整 | 備考    |
|------|------|--------|-------|-----|-------|-----|-----|----|----|------|--------------------------|----|-------|
| 1    | BZ1  | 第40図61 | Aトレンチ | III | (2.1) | 1.9 | 0.3 | 1  | 頁岩 | I群a類 | I~IIIab+R <sup>z-z</sup> |    | 欠損面有り |

## II群石器

| 通しNo | 遺物No | 挿図番号   | 出土地区  | 層位  | 長さ  | 幅     | 厚さ  | 重さ | 石材  | 形態    | 剥離  | 調整 | 備考      |
|------|------|--------|-------|-----|-----|-------|-----|----|-----|-------|---|----|---------|
| 2    | BZ2  | 第40図62 | Aトレンチ | 溝   | 4.1 | 2.7   | 0.8 | 6  | 頁岩  | II群a類 | I~IIIab+R <sup>z-z</sup>                  |    | 一欠刻離面有り |
| 3    | BZ3  | 第40図59 | Aトレンチ | I   | 4.0 | 2.7   | 0.8 | 5  | 頁岩  | II群c類 | I~IIIab+R <sup>z-z</sup>                  |    | 一欠刻離面有り |
| 4    | BZ4  | 第40図60 | Aトレンチ | I   | 4.9 | 2.9   | 1.1 | 7  | 頁岩  | II群c類 | I~IIIab+R <sup>z-z</sup>                  |    |         |
| 5    | BZ5  | 第40図63 | Bトレンチ | III | 3.7 | 2.0   | 0.9 | 4  | 頁岩  | II群c類 | I~IIIab+R <sup>z-z</sup> , R <sup>z</sup> |    | 石器未完成品  |
| 6    | BZ6  | 第40図65 | Aトレンチ | 溝10 | 5.5 | (3.0) | 0.5 | 7  | 花崗岩 | II群c類 | I~IIIab+R <sup>z-z</sup>                  |    | 欠損面有り   |

## III群石器

| 通しNo | 遺物No | 挿図番号   | 出土地区  | 層位      | 長さ  | 幅   | 厚さ  | 重さ | 石材 | 形態     | 剥離                     | 調整 | 備考    |
|------|------|--------|-------|---------|-----|-----|-----|----|----|--------|------------------------|----|-------|
| 7    | BZ7  | 第41図66 | Bトレンチ | I       | 4.7 | 3.3 | 1.2 | 16 | 頁岩 | III群a類 | I~IIb+R <sup>z-z</sup> |    | バルブ離去 |
| 8    | BZ8  | 第40図64 | Aトレンチ | 表土(4.1) | 2.9 | 1.1 | 1.1 | 11 | 頁岩 | III群c類 | I~IIb+R <sup>z-z</sup> |    | 尖端部欠損 |
| 9    | BZ9  | 第41図67 | Aトレンチ | KY51    | 4.7 | 3.7 | 0.8 | 8  | 頁岩 | III群c類 | Ib+R <sup>z-z</sup>    |    | 切断面有り |
| 10   | BZ10 | 第41図68 | Aトレンチ | II      | 3.9 | 3.9 | 1.0 | 10 | 頁岩 | III群c類 | I~IIb+R <sup>z-z</sup> |    | 自然面有り |

## IV群石器

| 通しNo | 遺物No | 挿図番号   | 出土地区  | 層位 | 長さ  | 幅   | 厚さ  | 重さ | 石材 | 形態    | 剥離                     | 調整 | 備考    |
|------|------|--------|-------|----|-----|-----|-----|----|----|-------|------------------------|----|-------|
| 11   | BZ11 | 第42図72 | Aトレンチ | 溝  | 7.0 | 5.7 | 1.0 | 30 | 頁岩 | IV群d類 | I~IIb+R <sup>z-z</sup> |    | 磨滅度有り |

## V群石器

| 通しNo | 遺物No | 挿図番号   | 出土地区  | 層位 | 長さ   | 幅    | 厚さ  | 重さ  | 石材  | 形態   | 剥離                                   | 調整 | 備考    |
|------|------|--------|-------|----|------|------|-----|-----|-----|------|--------------------------------------|----|-------|
| 12   | BZ12 | 第43図74 | Aトレンチ | 表土 | 7.9  | 4.5  | 2.2 | 78  | 頁岩  | V群b類 | I~R <sup>z-z</sup> +R <sup>z-z</sup> |    |       |
| 13   | BZ13 | 第44図77 | Aトレンチ | 表土 | 14.6 | 10.9 | 2.1 | 320 | 粘板岩 | V群f類 | I~IIIa+R <sup>z-z</sup>              |    |       |
| 14   | BZ14 | 第47図83 | Aトレンチ | 表土 | 9.7  | 8.7  | 2.7 | 110 | 粘板岩 | V群f類 | Ib+R <sup>z-z</sup>                  |    | 自然面有り |
| 15   | BZ15 | 第45図78 | Aトレンチ | 表土 | 11.9 | 6.6  | 2.5 | 170 | 頁岩  | V群f類 | I~IIab+R <sup>z-z</sup>              |    |       |

## VI群石器

| 通しNo | 遺物No | 挿図番号   | 出土地区  | 層位 | 長さ  | 幅   | 厚さ  | 重さ | 石材 | 形態    | 剥離                           | 調整 | 備考    |
|------|------|--------|-------|----|-----|-----|-----|----|----|-------|------------------------------|----|-------|
| 16   | BZ16 | 第41図69 | Bトレンチ | I  | 5.3 | 3.3 | 1.2 | 16 | 頁岩 | VI群b類 | I~IIab+R <sup>z-z</sup>      |    |       |
| 17   | BZ17 | 第41図70 | Aトレンチ | 溝4 | 4.7 | 3.1 | 1.8 | 21 | 頁岩 | VI群f類 | I~IIab+R <sup>z-z</sup>      |    | 節理面有り |
| 18   | BZ18 | 第41図71 | Aトレンチ | 表土 | 5.5 | 3.0 | 0.8 | 13 | 頁岩 | VI群f類 | I~IIIa+b+R <sup>z-z</sup>    |    |       |
| 19   | BZ19 | 第43図76 | Aトレンチ | 表土 | 6.9 | 4.2 | 1.6 | 33 | 頁岩 | VI群k類 | IIb+R <sup>z-z</sup>         |    | 自然面有り |
| 20   | BZ20 | 第43図75 | Aトレンチ | 表土 | 6.2 | 3.1 | 1.8 | 33 | 頁岩 | VI群f類 | Ia~III~IVb+R <sup>z-z</sup>  |    |       |
| 21   | BZ21 | 第42図73 | Aトレンチ | IV | 7.8 | 6.1 | 1.5 | 54 | 頁岩 | VI群f類 | I~IIab+R <sup>z-z</sup>      |    |       |
| 22   | BZ22 | 第45図79 | Aトレンチ | 表土 | 7.6 | 6.2 | 1.2 | 50 | 頁岩 | VI群f類 | I~IIab+R <sup>z-z</sup>      |    |       |
| 23   | BZ23 | 第46図80 | Aトレンチ | 表土 | 6.1 | 5.7 | 1.1 | 29 | 頁岩 | VI群f類 | I~IIb+R <sup>z-z</sup>       |    | 自然面有り |
| 24   | BZ1  | 第48図86 | 八幡堀古墳 | 表土 | 5.9 | 5.3 | 1.2 | 36 | 頁岩 | VI群f類 | I~IIab~IIIb+R <sup>z-z</sup> |    | 磨滅度有り |

## 堆群石器

| 通しNo | 遺物No | 堆岡番号   | 出土地区  | 層位 | 長さ  | 幅   | 厚さ  | 重さ | 石材 | 形 態  | 剥 離                       | 調 整   | 備 考 |
|------|------|--------|-------|----|-----|-----|-----|----|----|------|---------------------------|-------|-----|
| 25   | BZ24 | 第46#32 | Aトレンチ | 表土 | 5.1 | 5.0 | 1.2 | 33 | 頁岩 | 堆群g類 | I・II・IVb+R <sup>2-9</sup> |       |     |
| 26   | BZ25 | 第46#31 | Aトレンチ | 表土 | 6.0 | 3.3 | 1.0 | 15 | 頁岩 | 堆群g類 | I・IIa+R <sup>1-3</sup>    |       |     |
| 27   | BZ26 | 第47#34 | Aトレンチ | 表土 | 3.8 | 3.0 | 1.0 | 9  | 頁岩 | 堆群m類 | I・IVb+R <sup>1-6</sup>    | 切断面有り |     |

## XI群石器

| 通しNo | 遺物No | 堆岡番号   | 出土地区  | 層位 | 長さ   | 幅   | 厚さ  | 重さ  | 石材 | 形 態   | 剥 離 | 調 整 | 備 考   |
|------|------|--------|-------|----|------|-----|-----|-----|----|-------|-----|-----|-------|
| 28   | BZ27 | 第48#35 | Aトレンチ | 表土 | 10.4 | 7.0 | 5.4 | 180 | 頁岩 | XI群a類 |     |     | 自然面有り |

第12表 大樽遺跡出土礫計測表〔長さ・幅・厚さ(cm)・重さ(g)〕

| 通しNo | 遺物No | 堆岡番号   | 出土地区  | 層位  | 形能 | 断面    | 細 分   | 長径     | 短径   | 厚さ  | 重さ  | 石材    | 備 考   |
|------|------|--------|-------|-----|----|-------|-------|--------|------|-----|-----|-------|-------|
| 1    | 237  | 第49#87 | Aトレンチ | 表土  | C  | II C  | IA+C' | 12.6   | 10.9 | 4.6 | 880 | 硬砂岩   |       |
| 2    | 238  | 第50#93 | Aトレンチ | 表土  | C  | II C  | IA+C' | 8.1    | 8.0  | 3.7 | 360 | 硬砂岩   |       |
| 3    | 239  | 第49#89 | Aトレンチ | 表土  | C  | III D | IA+C' | (6.6)  | 6.9  | 4.3 | 210 | 石英粗面岩 | 欠損面有り |
| 4    | 240  | 第49#90 | Aトレンチ | 表土  | C  | II A  | IA+C' | (7.4)  | 6.6  | 5.5 | 300 | 泥岩    | 欠損面有り |
| 5    | 241  | 第50#91 | Aトレンチ | 表土  | C  | II C  | IB+C' | 10.4   | 7.7  | 4.1 | 350 | 安山岩   |       |
| 6    | 242  | 第49#88 | Aトレンチ | 表土  | C  | II A  | IB+C' | 5.8    | 4.9  | 4.8 | 190 | 石英粗面岩 |       |
| 7    | 243  | 第50#92 | Aトレンチ | 溝3f | E  | II C  | IB+IE | (14.0) | 11.1 | 4.8 | 460 | 安山岩   | 欠損面有り |

第13表 大樽遺跡A区 a トレンチ南壁溝状遺構自然堆積土層観察表

| 堆積土  | 土 色                | 土 性  | 備 考         |
|------|--------------------|------|-------------|
| 1 層  |                    |      | 耕作土及び擾乱層    |
| 2 層  | 黒褐色 (10Y R 3/2)    | 微砂質土 | 若干量の小礫を含む   |
| 3 層  | 暗褐色 (10Y R 3/3)    | 微砂質土 | 少量の豆粒大的礫を含む |
| 4 層  | 褐色 (10Y R 4/4)     | 微砂質土 |             |
| 5 層  | 黒褐色 (10Y R 2/2)    | 微砂質土 |             |
| 6 層  | 黄褐色 (10Y R 5/6)    | 微砂質土 | 黄砂を少量含む     |
| 7 層  | 黒褐色 (10Y R 3/1)    | 砂質土  | 多量の礫を含む     |
| 8 層  | にぶい黄褐色 (10Y R 5/3) | 微砂質土 | 微量小礫を含む     |
| 9 層  | 明黄褐色 (10Y R 6/6)   | 砂利土  | 大形の礫を多量に含む  |
| 10 層 | 黒褐色 (10Y R 2/2)    | 微砂質土 |             |
| 11 層 | 灰黄褐色 (10Y R 4/2)   | 微砂質土 | 少量の礫を含む     |
| 12 層 | 黒褐色 (10Y R 3/1)    | 微砂質土 |             |
| 13 層 | 灰黄褐色 (10Y R 5/2)   | 微砂質土 | 少量の礫を含む     |
| 14 層 | 黒褐色 (10Y R 3/2)    | 微砂質土 | 大・小の礫を含む    |

第14表 大樽遺跡出土剝片分類計測表 [長さ、幅、厚さ(cm)、重さ(g)]

| 遺物名                 | 出土場所 | 出土地点 | 形態                 | 計量 | 長さ    | 幅   | 厚さ  | 備考    | 遺物名                  | 出土場所 | 出土地点 | 形態                 | 計量 | 長さ    | 幅   | 厚さ  | 備考    |
|---------------------|------|------|--------------------|----|-------|-----|-----|-------|----------------------|------|------|--------------------|----|-------|-----|-----|-------|
| 1 39 A 灰土 a         |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 7.6   | 6.0 | 4.5 |       | 64 129 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.8   | 1.2 | 1.6 |       |
| 2 85 A-b② 灰土 a      |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.3   | 2.0 | 9   |       | 65 209 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.5   | 2.0 | 4   |       |
| 3 91 A-b②-ky 灰土 a   |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.1   | 2.0 | 10  |       | 66 2 A 灰土 a          |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.1   | 1.8 | 21  |       |
| 4 98 A-b② 灰土 a      |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.2   | 2.6 | 7   | 自然面有り | 67 6 A-b 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.5   | 1.9 | 25  |       |
| 5 113 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.7   | 1.8 | 8   | 自然面有り | 68 25 A-b 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 7.8   | 4.4 | 60  |       |
| 6 125 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.0   | 2.0 | 11  |       | 69 38 A 灰土 a         |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 7.8   | 5.7 | 49  |       |
| 7 131 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.0   | 1.4 | 37  |       | 70 43 A-b② 灰土 a      |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.4   | 1.8 | 43  |       |
| 8 131 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.2   | 2.3 | 5   | 自然面有り | 71 44 A 灰土 a         |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.4   | 1.2 | 28  |       |
| 9 186 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.3   | 1.4 | 7   | 自然面有り | 72 160 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.4   | 1.1 | 14  | 自然面有り |
| 10 217 A-b② 灰土 a    |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.4   | 1.9 | 4   |       | 73 186 A-b②-ky 灰土 a  |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.5   | 2.0 | 3   |       |
| 11 239 B 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.7   | 1.2 | 12  |       | 74 181 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.8   | 1.3 | 6   |       |
| 12 53 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup> +1C |    | (4.7) | 4.6 | 18  |       | 75 186 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.3   | 2.5 | 5   |       |
| 13 140 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup> +1C |    | (1.0) | 1.5 | 5   |       | 76 186 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.2   | 2.5 | 5   |       |
| 14 228 A-b② 灰土 a    |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.5   | 1.4 | 14  |       | 77 131 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.2   | 1.8 | 17  |       |
| 15 46 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.5   | 1.8 | 42  |       | 78 141 A-b②-ky 灰土 a  |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.5   | 2.8 | 4   | 自然面有り |
| 16 57 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.6   | 2.5 | 6   |       | 79 181 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.9   | 1.2 | 1   |       |
| 17 71 A-b②-ky 灰土 a  |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.2   | 1.1 | 15  |       | 80 182 B 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.5   | 2.2 | 10  |       |
| 18 72 A-b②-ky 灰土 a  |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.7   | 1.8 | 12  |       | 81 186 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 8.6   | 5.3 | 51  |       |
| 19 94 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.0   | 1.3 | 8   |       | 82 186 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup> +2D |    | (4.0) | 3.8 | 8   |       |
| 20 182 A-b② 灰土 a    |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.5   | 1.9 | 3   |       | 83 1 B 灰土 a          |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.5   | 4.4 | 44  |       |
| 21 182 A-b② 灰土 a    |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.4   | 1.3 | 7   |       | 84 5 A-a 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.5   | 5.8 | 52  |       |
| 22 185 A-b② 灰土 a    |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.1   | 1.4 | 8   |       | 85 11 B 灰土 a         |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.5   | 5.6 | 56  | 自然面有り |
| 23 188 A-b②-ky 灰土 a |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.2   | 1.7 | 3   |       | 86 16 B 灰土 a         |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.8   | 5.3 | 78  | 自然面有り |
| 24 187 A-b②-ky 灰土 a |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.8   | 2.5 | 2   |       | 87 36 A-b② 灰土 a      |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.2   | 4.7 | 27  | 自然面有り |
| 25 189 B 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.8   | 1.1 | 17  |       | 88 65 A 灰土 a         |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.6   | 5.6 | 69  |       |
| 26 188 A-b② 灰土 a    |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.3   | 1.8 | 8   |       | 89 52 A-b②-ky 灰土 a   |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.5   | 4.8 | 31  |       |
| 27 186 A-b② 灰土 a    |      |      | a <sup>2</sup> +1A |    | (3.0) | 4.3 | 29  | 自然面有り | 90 84 A-b② 灰土 a      |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.8   | 3.3 | 15  |       |
| 28 185 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup> +1D |    | (4.7) | 3.2 | 13  | 自然面有り | 91 186 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.7   | 1.8 | 2   |       |
| 29 189 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup> +1C |    | (3.0) | 2.2 | 2   |       | 92 186 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.8   | 2.6 | 6   | 自然面有り |
| 30 181 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup> +1D |    | (3.0) | 2.2 | 2   |       | 93 186 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.8   | 2.2 | 8   | 自然面有り |
| 31 181 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.8   | 2.8 | 6   |       | 94 28 A-b② 灰土 a      |      |      | a <sup>2</sup> +1C |    | (1.9) | 2.3 | 2   |       |
| 32 186 A-b② 灰土 a    |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.8   | 1.3 | 1   |       | 95 8 A 灰土 a          |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.5   | 4.8 | 39  |       |
| 33 7 A 灰土 a         |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 1.9   | 3.3 | 84  | 自然面有り | 96 9 A 灰土 a          |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.3   | 4.3 | 33  |       |
| 34 219 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.7   | 3.3 | 27  |       | 97 13 B 灰土 a         |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.3   | 3.8 | 8   |       |
| 35 183 B 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.1   | 2.3 | 17  |       | 98 14 B 灰土 a         |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.8   | 5.8 | 98  |       |
| 36 92 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.7   | 3.3 | 9   |       | 99 15 A 灰土 a         |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.8   | 4.4 | 78  | 自然面有り |
| 37 184 A-b② 灰土 a    |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.4   | 1.5 | 4   |       | 100 24 B 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.2   | 2.8 | 16  |       |
| 38 186 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.7   | 2.7 | 16  |       | 101 26 A-b②-ky 灰土 a  |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.3   | 3.8 | 34  |       |
| 39 189 A-b② 灰土 a    |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.0   | 5.0 | 25  |       | 102 31 A-b②-ky 灰土 a  |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.3   | 5.4 | 47  | 自然面有り |
| 40 189 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.2   | 2.4 | 6   |       | 103 35 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.0   | 5.3 | 43  |       |
| 41 182 A-b②-ky 灰土 a |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.2   | 2.8 | 2   |       | 104 45 B 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.0   | 5.1 | 55  |       |
| 42 20 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.3   | 2.3 | 18  |       | 105 54 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.6   | 5.8 | 42  |       |
| 43 186 A-b②-ky 灰土 a |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.8   | 2.3 | 6   |       | 106 50 A-b②-ky 灰土 a  |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.8   | 4.3 | 33  | 自然面有り |
| 44 28 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.3   | 2.3 | 5   |       | 107 66 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.5   | 4.8 | 82  |       |
| 45 70 B 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 1.8   | 3.3 | 14  | 自然面有り | 108 61 A-b②-ky 灰土 a  |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.8   | 5.3 | 43  |       |
| 46 81 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.3   | 4.1 | 23  |       | 109 66 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.8   | 6   |     |       |
| 47 111 A-b②-ky 灰土 a |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.2   | 2.8 | 4   |       | 110 77 A-b②-ky 灰土 a  |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.2   | 1.1 | 10  |       |
| 48 150 A-b②-ky 灰土 a |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.3   | 2.8 | 3   |       | 111 93 B 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.8   | 2.8 | 13  |       |
| 49 30 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.2   | 6.1 | 68  |       | 112 111 A-b② 灰土 a    |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.8   | 3.2 | 12  | 自然面有り |
| 50 56 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.7   | 3.8 | 22  |       | 113 121 A-b② 灰土 a    |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.7   | 1.7 | 29  |       |
| 51 182 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.5   | 1.8 | 4   |       | 114 122 A-b② 灰土 a    |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.8   | 4.3 | 33  | 自然面有り |
| 52 186 B 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.7   | 1.9 | 8   |       | 115 160 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.5   | 4.8 | 82  |       |
| 53 186 A-b②-ky 灰土 a |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.3   | 1.5 | 3   | 自然面有り | 116 61 A-b②-ky 灰土 a  |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 6.8   | 5.3 | 43  |       |
| 54 177 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.3   | 4.8 | 16  |       | 117 66 A 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.8   | 3.8 | 15  |       |
| 55 186 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.2   | 2.8 | 10  |       | 118 77 A-b② 灰土 a     |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.8   | 3.8 | 12  |       |
| 56 141 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.2   | 2.3 | 15  |       | 119 153 A-b②-ky 灰土 a |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.6   | 2.3 | 13  | 自然面有り |
| 57 184 B 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.3   | 2.8 | 3   |       | 120 155 A-b②-ky 灰土 a |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.2   | 3.4 | 34  | 自然面有り |
| 58 183 A-b②-ky 灰土 a |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.7   | 1.1 | 3   |       | 121 180 B 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 5.8   | 4.3 | 60  |       |
| 59 187 A-b②-ky 灰土 a |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.6   | 2.4 | 6   |       | 122 185 B 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.5   | 3.2 | 8   |       |
| 60 189 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.6   | 1.9 | 4   |       | 123 194 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.5   | 3.1 | 9   |       |
| 61 184 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.7   | 1.4 | 4   |       | 124 221 B 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 3.5   | 1.9 | 4   | 自然面有り |
| 62 185 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.7   | 1.5 | 2   |       | 125 41 B 灰土 a        |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.8   | 4.1 | 1   |       |
| 63 177 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 2.6   | 2.8 | 2   |       | 126 167 A 灰土 a       |      |      | a <sup>2</sup>     |    | 4.8   | 3.4 | 18  |       |

| 品種名 | 母本品種名 | 父本品種名       | 形態 | 出芽 | 花序                 | 葉   | 穗   | 穗重   | 穗粒數  | 產量 |
|-----|-------|-------------|----|----|--------------------|-----|-----|------|------|----|
| 35  | 4     | A           | 直立 | a  | a <sup>11</sup>    | 3.4 | 2.5 | 21   |      |    |
| 10  | 10    | A- $\alpha$ | 直立 | a  | a <sup>11</sup>    | 3.9 | 5.0 | 自然開穗 |      |    |
| 12  | 12    | B           | 直立 | a  | a <sup>11</sup>    | 3.2 | 4.0 | 19   |      |    |
| 02  | 02    | B           | 直立 | a  | a <sup>11</sup>    | 7.1 | 3.4 | 65   |      |    |
| 45  | 45    | A           | 直立 | a  | a <sup>11</sup>    | 4.2 | 4.9 | 19   |      |    |
| 02  | 02    | A           | 直立 | a  | a <sup>11</sup>    | 3.3 | 3.4 | 34   |      |    |
| 04  | 04    | A- $\alpha$ | 直立 | a  | a <sup>11</sup>    | 4.8 | 4.3 | 24   |      |    |
| 05  | 05    | B           | 直立 | I  | a <sup>11</sup>    | 3.1 | 3.8 | 7    |      |    |
| 31  | 31    | B           | 直立 | a  | a <sup>11</sup>    | 2.8 | 1.8 | 2    |      |    |
| 29  | 29    | A- $\alpha$ | 直立 | a  | a <sup>11</sup> -A | 5.5 | 19  |      |      |    |
| 22  | 22    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.5 | 4.7 | 10   |      |    |
| 27  | 27    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.4 | 4.4 | 14   |      |    |
| 50  | 50    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.3 | 3.9 | 7    |      |    |
| 00  | 00    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.5 | 5.6 | 45   |      |    |
| 07  | 07    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 2.8 | 4.3 | 19   | 自然開穗 |    |
| 08  | 08    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.0 | 4.4 | 10   |      |    |
| 04  | 04    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 2.9 | 2.7 | 2    |      |    |
| 04  | 04    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 2.9 | 3.9 | 14   |      |    |
| 05  | 05    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.3 | 6.8 | 40   |      |    |
| 06  | 06    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.4 | 4.3 | 29   | 自然開穗 |    |
| 39  | 39    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.2 | 2.7 | 2    |      |    |
| 35  | 35    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 1.2 | 2.2 | 1    |      |    |
| 35  | 35    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.2 | 5.3 | 46   |      |    |
| 38  | 38    | B           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.4 | 6.6 | 37   |      |    |
| 24  | 24    | B           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.0 | 4.2 | 20   | 自然開穗 |    |
| 74  | 74    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.3 | 3.2 | 15   |      |    |
| 75  | 75    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.3 | 4.4 | 10   |      |    |
| 85  | 85    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.2 | 3.2 | 16   |      |    |
| 95  | 95    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.3 | 4.9 |      |      |    |
| 01  | 01    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.1 | 4.2 | 9    |      |    |
| 52  | 52    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.2 | 4.3 | 18   |      |    |
| 09  | 09    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.2 | 3.3 | 4    |      |    |
| 65  | 65    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.6 | 15  |      |      |    |
| 68  | 68    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.2 | 2.5 |      |      |    |
| 79  | 79    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.3 | 4.5 | 16   |      |    |
| 90  | 90    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.3 | 4.2 |      |      |    |
| 10  | 10    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.5 | 2.8 |      |      |    |
| 51  | 51    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.2 | 3.2 | 15   |      |    |
| 7   | 7     | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.3 | 4.7 | 26   |      |    |
| 63  | 63    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.2 | 6.8 | 39   |      |    |
| 69  | 69    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.8 | 5.8 | 17   |      |    |
| 23  | 23    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.2 | 4.3 | 15   |      |    |
| 28  | 28    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.2 | 4.5 | 16   |      |    |
| 97  | 97    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 2.5 | 2.5 | 22   |      |    |
| 99  | 99    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.5 | 4.3 | 12   |      |    |
| 32  | 32    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 2.8 | 4.7 | 7    |      |    |
| 34  | 34    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 2.8 | 3.4 | 9    |      |    |
| 32  | 32    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.2 | 3.3 | 40   |      |    |
| 18  | 18    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 2.5 | 2.5 | 3    |      |    |
| 37  | 37    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 2.4 | 2.5 | 2    |      |    |
| 21  | 21    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup> +2D | 2.2 | 1.8 | 1    |      |    |
| 24  | 24    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup> +2D | 2.0 | 2.0 |      |      |    |
| 55  | 55    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.0 | 6.0 | 26   |      |    |
| 08  | 08    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 1.5 | 4.7 | 11   | 自然開穗 |    |
| 20  | 20    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.8 | 4.8 | 30   | 自然開穗 |    |
| 22  | 22    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.3 | 7.1 | 63   | 自然開穗 |    |
| 76  | 76    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.8 | 4.3 | 19   |      |    |
| 22  | 22    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.5 | 2.5 | 2    |      |    |
| 33  | 33    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.2 | 3.8 | 3    |      |    |
| 56  | 56    | B           | 直立 | b  | b <sup>1</sup> +1A | 3.2 | 5.0 | 12   |      |    |
| 17  | 17    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.1 | 6.5 | 40   |      |    |
| 19  | 19    | A- $\alpha$ | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 3.3 | 7.5 | 10   | 自然開穗 |    |
| 29  | 29    | A           | 直立 | b  | b <sup>1</sup>     | 4.7 | 7.3 | 28   |      |    |

## 参考文献

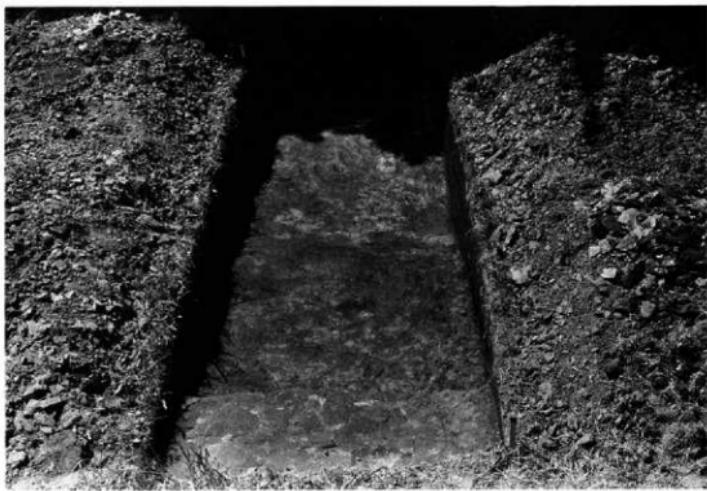
- 中村忠雄編 (1972)『旧米沢市町名由来』
- 米沢古誌研究会 (1974)『米沢古誌類纂』(米沢事跡考・米府鹿の子・米沢地名選)
- 柏倉亮吉・加藤 稔・手塚 孝 (1975~1977)『米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書』第1集~第2集 米沢市教育委員会
- 川崎利夫 (1977)「米沢盆地における古墳の変遷に関する試論」『山形考古』Ⅲ-1
- 秦 昭繁他 (1977)『松原』置賜考古学会
- 加藤 稔 (1978)「容姿を余儀なくされた古墳群—東北南半の前・中古墳についての試論—」『山形史学研究』13号・14号
- 氏家和典 (1978)「東北における大型古墳の企画性と編年」『東北歴史資料館研究紀要』4号
- 佐藤鎮雄・保角里志 (1979)『稲荷森古墳—昭和53年度調査概報』 山形県立博物館
- 保角里志 (1980)『稲荷森古墳—昭和54年度調査概報』 山形県立博物館
- 加藤 稔 (1980)「最上川流域での大型古墳出現の意義」(上)『羽黒文化』109号
- 秦 昭繁 (1981)『上竹井』 上竹井遺跡発掘調査団
- 手塚 孝・菊地政信 (1982)『米沢市桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書第1集』『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第6集 米沢市教育委員会
- 佐藤鎮雄 (1982)「置賜地方の古墳—南陽市周辺の古墳を中心として」『まんぎり創刊号』
- 加藤 稔・佐藤鎮雄 (1982)「最上川流域の前方後円(方)墳」「最上川」 山形県学術調査会
- 手塚 孝・菊地政信 (1983)『米沢市桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書第2集』『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第8集 米沢市教育委員会
- 加藤 稔・手塚 孝・龜田晃明 (1983)『戸塚山第137号墳発掘調査報告書』『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第9集 米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信他 (1984)『戸塚山古墳群詳細分布調査報告書』『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第10集 米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信 (1984)『左沢』『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第11集 米沢市教育委員会
- 米沢市 (1985)『米沢市史・資料篇1』 米沢市史編纂委員会
- 手塚 孝 (1986)『米沢の古代文化』 まんぎり会
- 手塚 孝・菊地政信 (1986)『米沢市桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書第3集』『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第17集 米沢市教育委員会
- 加藤 稔・藤田有宣他 (1986)『天神森古墳発掘調査報告書』 川西町教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信・村山正市・橋爪 健 (1986)『上浅川第3次発掘調査報告書』『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第15集 米沢市教育委員会
- 川崎利夫 (1986)「日本海側行政圏域における古墳の実態と展回」『東アジアの近代文化』47号
- 藤田宥宣 (1986)『下小松墳丘群小森山支群第60・64号墳調査報告書』 川西町教育委員会
- 手塚 孝・水野 哲・村山正市他 (1986)『戸長里窪』 まんぎり会
- 菊地政信・手塚 孝・橋爪 健 (1987)『宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書』『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第19集 米沢市教育委員会
- 佐藤正四郎 (1988)『笠松山遺跡発掘調査報告書』 白鷹町教育委員会
- 手塚 孝 (1988)『比丘尼平発掘調査報告書』『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第21集 米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信・金子正廣 (1988)『遺跡詳細分布調査報告書第1集』『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第23集 米沢市教育委員会

# 写 真 図 版

---



▲ A トレンチセクション状況



▲ A トレンチ完掘状況



▲ F トレンチ完掘状況

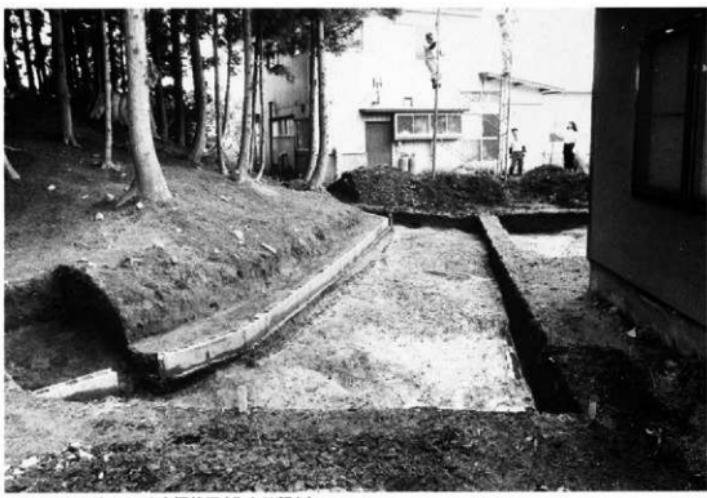


▲ B トレンチ完掘状況

第三図版 八幡塚古墳の発掘(3)



▲ D・E トレンチ完掘状況



▲ D トレンチ完掘状況(北より望む)